
平成30年度共通教育 活動報告書

I 「共通教育実施委員会」活動の総括	1 ^P
II カリキュラム等編成部会	4
III 自己点検・自己評価部会	5
IV FD部会	8
V 広報部会	8
VI 分科会報告	
1 大学基礎論分科会	10
2 課題探求実践セミナー分科会	16
3 学問基礎論分科会	19
4 人文分野分科会	48
5 社会分野分科会	51
6 生命・医療分科会	55
7 自然分野分科会	60
8 外国語分科会	63
9 キャリア形成支援科目分科会	65
10 スポーツ・健康分科会	66
11 日本語・日本事情分科会	68

平成30年度「共通教育実施委員会」活動の総括

2019年 3月27日
共通教育実施委員会

1. 共通教育実施委員会および常任会議

本年度は、第1回実施委員会(H30年5月30日開催)において、以下の3項目を重点事項として掲げた。

- ①学部ごとおよび分野ごとの平成31年度の共通教育授業の担当体制は、今年度(平成30年度)の担当体制を基準とし、各学部で定めている共通教育に関わるカリキュラム・ポリシー、今年度の開講状況および受講状況、分野ごとのバランスや各学部所属教員の専門分野の構成、等を考慮して決定する。
- ②「公正な成績評価の実施に向けて(申し合わせ)」および「公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されていることを担保するための体制の構築」(平成30年3月19日、学士課程運営委員会決定)に従って、共通教育における質保証体制を整備する。
- ③共通教育教養科目カリキュラムの点検と改善に向けた取り組みを行う。

それぞれの重点事項に関する成果は以下の通りである。

平成31年度担当体制の検討に際しては、①の方針どおり、平成29年度以後の学部人事ポイント変化を、基本人数・コマ数に乗じることによって、基本数(開講コマ数)を決定した。その結果、独自にカリキュラムが運営されている医学部を除いて、すべての学部で減となった(全体で24コマ減)。この結果に従い、平成31年度カリキュラムはほぼ順調に編成することができた(詳細については、以下のカリキュラム等編成部会および各分科会の報告を参照)。

②、および③については、各分科会長と主管および自己点検・自己評価部会長との意見交換を通じて行った。具体的には、各分科会所管の開講科目について、受講者数および成績分布データの分析、非常勤講師が担当する授業の点検等を含め、カリキュラム全般について意見交換を行うことができた。これは昨年度に引き続いて実施した成果と言えるが、今後もこの活動を継続していく必要がある。特に、習熟度別クラス編成に対応した大学英語入門については、学部を超えたワーキンググループにより検討を進めることができた。

2. 部会活動

本委員会では、これまで「カリキュラム等編成部会」、「自己点検・自己評価部会」、「FD部会」、「広報部会」の4部会において、それぞれの領域における委員会全体の取りまとめや分科会活動への支援を行ってきており、今年度もこの方式を継続した。以下、各部会の取り組みの要点のみ、略記する(詳細は各部会の報告を参照)。

カリキュラム等編成部会では、3回のカリキュラム等編成部会を通じて、「平成31年度共通教育担当体制に係る基本方針」に沿って次年度のカリキュラム編成作業を行い、各分科会の協力を得て、カリキュラム編成作業を完遂できた。

自己点検・自己評価部会では、部会長および主管が各分科会長と、成績分布やカリキュラムの問題点について面談による意見交換を行った。この他、授業改善アクションプランの依頼、実施、

およびアンケート結果の分析による授業改善活動を行った。

FD 部会では、分科会と協力して能動学習の授業への導入支援を行うことを計画した。部会独自の活動はできなかったが、共通教育全体としては、人文分野、社会分野、生命・医療分野、外国語分野、スポーツ・健康分野、など多くの分科会においてFD活動が行われた。また、鳥取大学で開催された第66回中国四国地区大学教育研究会に5名の委員が参加した。

広報部会では、『パイプライン』第52号を12月に発行、第53号を3月に発行(予定)した。電子化された広報誌『パイプライン』の読まれ方について、当該ウェブサイトへのアクセス数を確認・分析し、改善案を検討した。

3. 分科会活動

本委員会における分科会活動は、これまで「カリキュラム編成」「自己点検評価」「FD」という3つの任務を柱として自律的に取り組んできた。以下、各分科会で取り組まれた活動について、それぞれの項目ごとの概要は以下の通りである(詳細については各分科会の報告を参照)。

(1) カリキュラム編成の取り組み

カリキュラム編成の詳細については、分科会ごとの個別の報告に譲る。各分科会では、カリキュラム等編成部会で提示されたコマ数の授業を揃えることができた。特に記録すべき点としては、教育学部保健体育教員が平成31年度退職不補充となるという状況を考慮し、履修希望者に対応できる体制を整えること、および教育学部内での分野調整により学部ノルマを達成することを条件に、スポーツ・健康科目の科目数減を了承した(詳細は、分科会報告を参照)。

また、課題探求実践セミナーについては、オープンクラスとして開講してきた「地域協働入門Ⅰ」と「地域協働入門Ⅱ」及び「学びを考える」の3題目が平成31年度は開講しないこととなった。全クラス総定員では全学生の受入は可能とはなっているが、受入数が学生数より少ない学部・学科がある。時間割の関係等で、自分の学部のクラスから履修登録で漏れた学生がオープンクラスでも履修できないケースが予想されるので、今後、開講状況を注視していく必要がある。

以下、カリキュラムの編成作業ではないが、今年度実施した授業の内容改善に関する取り組みについて、若干、付記する。

外国語分科会では、大学英語入門の改善に向け、英語教員のあいだで、英語教育等に関する様々なテキストや資料を入手し、検討が行われた。

キャリア形成支援科目分科会では、各授業について、共通教育として実施すべきかどうかを再検討した。特に非常勤講師に依頼している講義について、講師本人の講義についての認識を共有したほか、次年度の担当についての確認を行った。その結果、1講義について名称変更、2講義を新設した。

(2) 自己点検評価の取り組み

今年度は、昨年度に引き続き、成績分布の評価についての議論を進めたが、各分科会においても、成績評価に関して活発な議論がなされた。これ以外の、各分科会におけるおもな取り組みは、以下の通りであった。

学問基礎論分科会では、moodle システムを活用して 15 項目にわたる授業アンケートが実施され、学部ごとに詳細な分析が報告された。

課題探求実践セミナー分科会では、1 学期 2 学期共に、授業評価アンケートの実施および結

果の分析を行った。

人文分野分科会では、平成 29 年度 2 学期の成績分布の解析を行った。該当科目 20 のうち、優以上の評価が受講生 50%以上であった授業は5科目 (25.0%)であった。しかしながら、担当教員に確認したところ、5科目中4科目は分析対象外となる教育活動に該当していたこと等が報告されている。

社会分野分科会では、5 週目・15 週目授業評価アンケートを、9 科目（第 1 学期 2 科目、第 2 学期 7 科目）について実施した。その結果、15 週目の授業の満足度は、5 週目と比べて 1-2 割程度高くなっていることが確認された。

自然分野分科会では、開講された科目について、これまでの成績分布の分析を行った。

キャリア形成支援科目分科会では、成績評価基準とガイドラインの設定に関連して、関連科目でのアクティブラーニングなどの実施状況を把握するとともに、秀・優などの評価基準について確認を行い、担当委員間でのその共有を進めた。

生命・医療分科会では、A-D4 クラスの履修クラスを対象として、平成 30 年度 1 学期の「健康」の授業評価アンケート結果とその分析が詳細に報告された。「全体としてこの授業に満足しているか」との質問に対する回答の全クラス平均が、5 段階評価で、昨年より 0.15 ポイント向上した。1 クラスの人数は 125 名～177 名となり、ある程度分散することができていることが報告された。

スポーツ・健康分科会では学期末に各授業題目について学生授業アンケートを実施した。アンケート結果を分析し、授業担当者に報告した。

(3)各分科会でのおもなFD活動の取り組み

学問基礎論分科会では、授業の実施形態が学部ごとに異なるため、学部ごとにその特性に合わせた FD 活動を実施した。昨年度に引き続き、学問基礎論の一部において、アカデミック・ライティングの講義を導入して、学問基礎論で学生自身が学んだ内容を正しく、かつ正確に他者に伝える力を養成したが、その様子を学問基礎論担当者が見学する、あるいは、そこでの指導内容の概要資料の通読を通じて授業担当者の Faculty Development に務めた。

人文分野分科会では、成績評価の問題、特にGPAの信頼度を高めるために成績基準の平準化について、跡見学園女子大学文学部、愛媛大学人文学部、茨城大学教育学部、新潟大学教育学部を含む他大学への聞き取り調査を行い、その結果に基づいてFD研修を実施した。

社会分野では、「FD企画 地域におけるワークショップ実践例の共有」をテーマとして、正課・正課外でのワークショップ実践例を振り返りながら、課題点を議論した。

スポーツ・健康分科会および生命・医療分科会では、「ミックススポーツ I」について授業参観を実施した。また、学生の聞き取り調査や担当教員間の意見交換からミックススポーツの次年度以降の在り方について検討した。多人数授業(スポーツ科学講義C)の改善策について担当教員を交えて議論した。

日本語・日本事情分科会では、文部科学省の最優先課題である「高度外国人材の日本企業への就職の拡大」を目的としたビジネス日本語教育に焦点を当て、2018年9月に広島大学に赴きビジネス日本語研修を受講した。それを踏まえて、第2学期に行われた日本語科目内で留学生の日本での就職に繋がる日本語教育を展開した。

以上のほか、第55 回国立大学教養教育実施組織会議・同事務協議会(群馬大学で開催)に主管が理事(教育・国際担当)・学務部長と共に参加した。

4. その他

- (1) 『平成 30 年度共通教育実施委員会活動報告書』は 4 月中に発刊し、WEB 上で公開する。
- (2) 委員が交代する場合には、次年度の課題に対する検討も含め、引き継ぎをお願いしたい。

II カリキュラム等編成部会

カリキュラム等編成部会長 有川 幹彦

1. カリキュラム等編成活動の経過

2018 年 7 月 17 日 第 1 回カリキュラム等編成部会

共通教育授業担当体制の決定方法について説明を行った後、平成 31 年度共通教育に係る担当体制を提案し、これが了承された。また、平成 30 年度のカリキュラム等編成部会スケジュールを確認した。

2018 年 10 月 4 日 第 2 回カリキュラム等編成部会

平成 31 年度共通教育授業担当体制が了承された。これを受けて、各分科会長に対して、平成 31 年度共通教育授業題目表の作成を依頼した。また、機構・センター等所属の教員に対して、平成 31 年度共通教育の授業担当の協力を依頼した。

2019 年 1 月 17 日 第 3 回カリキュラム等編成部会

平成 31 年度の共通教育授業題目表を確定させた。また、機構・センター等所属教員による新規科目、および知プラ科目の確認を行った。

2. 平成 30 年度カリキュラム等編成活動の総括

次年度に向けたカリキュラム編成は、全体としてはほぼ順調に進めることができた。しかし、問題点の共有と、それについての議論が不十分な分科会もあり、完成した共通教育授業題目表は完全なものとは言い難い部分も少なからずある。それでも、概ね、共通教育担当体制に係る基本方針に沿ったカリキュラムを編成することができた。ただし、共通教育担当教員の基本人数や基本体制の見直しについて、さらには共通専門科目の扱いについては、面談を通じて各分科会長と意見を交換するなどして、今後も継続して検討していく必要がある。

Ⅲ. 自己点検・自己評価部会

文責: 共通教育主管 近藤康生

平成 30 年度活動の概略と分析の概要(共通教育平成 30 年度授業アンケートの分析)

自己点検・自己評価部会では、平成 30 年度の活動方針として、授業改善アクションプランの取り組みを行うことと、成績分布の分析を行うこと、を掲げた。成績分布に関しては、別途、全学的にも分析結果がとりまとめられることから、ここでは、本年度実施された「授業改善アクションプラン」の分析について絞って述べ、本部会の報告とする。

「授業改善アクションプラン」とは、平成 20 年度 2 学期より試行され、平成 24 年度 2 学期より本格実施されたもので、他者評価に基づく授業改善プランを作成し、それを提示・実行・検証することで授業改善と教育力向上をめざす取り組みである。このアンケートにおける全授業共通の質問は以下の通りである(括弧内は、紙媒体の質問項目番号)。

Q1: この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか。

Q2 (Q4): この授業で教員は、受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行っていると思いますか。

Q3 (Q7): この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか。

Q4 (Q10): この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか。

Q5 (Q13): この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか。

Q6 (Q16): この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか。

この他、「授業改善アクションプランの効果」をきく質問項目(授業改善アクションプラン・・・は授業をよりよいものにするために効果がありましたか)、「学生の諸能力の獲得(授業達成目標)」をきく質問項目(あなたは・・・を達成できたと思いますか)が、それぞれの授業ごとに設定されている。本項では、共通質問項目だけを扱うこととする。

回答は、「はい」、「どちらかというとはい」、「どちらともいえない」、「どちらかというといいえ」、「いいえ」の 5 択であるが、分析に際しては、「はい」および「どちらかというとはい」の合計を肯定的回答として扱い、その割合を分析した。

分析結果と考察

平成30年度1学期および2学期に実施された「授業改善アクションプラン」によるアンケート結果の概要を表1および表2に示す。

表1. 平成30年度1学期授業アンケート結果の概要. アンケート結果の数値はすべて肯定的回答の割合(%)で示す.

紙媒体によるアンケート結果

アンケート 時期	授業題目	受講 者数	回答数	回答者の割 合(%)	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6
5週目	A	30	34	113.3	94	83	95	100	91	97
15週目	A	30	29	96.7	93	83	83	82	90	93
5週目	B	13	13	100.0	61	77	92	77	77	77
5週目	C	113	46	86.7	67	67	74	72	63	54
5週目	D		52		69	65	75	83	83	77
5週目	E	65	60	92.3	83	75	85	65	73	83
15週目	E	65	59	90.8	80	75	83	78	84	81
5週目	F	17	17	100.0	83	94	94	89	94	95
15週目	F	17	15	88.2	100	100	100	93	80	100
5週目	G	19	15	78.9	94	93	87	93	87	93
15週目	G	19	16	84.2	87	100	94	94	94	88
5週目	H	59	34	57.6	88	79	88	67	70	91
15週目	H	59	42	71.2	89	81	95	86	86	88
5週目	I	59	57	96.6	93	83	81	90	79	72
15週目	I	59	59	100.0	93	89	95	91	90	97
5週目	J	36	27	75.0	81	74	96	71	86	74
15週目	J	36	28	77.8	82	75	86	60	75	86

回答率の平均 88.1

表および表2に示すとおり、共通教育が実施している授業アンケートの実施件数は、1学期10科目、2学期科13目、計23科目(昨年比で5科目減)であった。平成26年度には計40を超える科目で実施されていたが、その後少しずつ実施件数が減り、今に至っている。

アンケートの実施方式については、紙媒体が18科目、WEB上が5科目であった。

それぞれの授業について、評価を5週目と15週目で比較してみると、全体的な改善傾向は明らかである。5週目に比べて、15週目が5ポイント以上改善した数値にオレンジ色の網掛けをし、同様に改悪した数値にブルーを網掛けしたが、5週目と15週目のデータが揃っている17科目のうち12科目(71%)で改善傾向が認められる。5週目と15週目で評価が拮抗していたり、改悪しているように見えたりする科目でも、評価(肯定的回答の割合)がもともと非常に高く、改善の余地がほとんどない場合が多い。以上のことから、もともと評価の高い授業で、授業アンケートが実施され、さらに改善されていることがうかがえる。つまり、現在行っている授業アンケートは、学生評価の高い授業をさらに良くする点では効果をあげている、と言える。

表2. 平成30年度2学期授業アンケート結果の概要. アンケート結果の数値はすべて肯定的回答の割合(%)で示す. 質問項目Q1, Q2等については本文参照.

紙媒体によるアンケート結果

アンケート ト時期	授業題目	受講 者数	回答者 数	回答者の割 合 (%)	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6
5週目	K	9	11	122.2	91	91	83	81	91	82
15週目	K	9	11	122.2	91	100	91	91	100	100
5週目	L	171	142	83.0	93	88	90	77	86	85
15週目	L	171	126	73.7	96	90	96	82	94	92
5週目	M	29	26	89.7	80	77	85	77	80	85
15週目	M	29	26	89.7	93	85	92	94	92	93
5週目	N	28	20	71.4	90	80	80	70	75	90
15週目	N	28	22	78.6	91	86	87	86	91	87
5週目	O	77	61	79.2	97	95	98	97	97	98
15週目	O	77	47	61.0	98	96	98	96	98	96
5週目	P	66	57	86.4	91	84	88	93	87	86
15週目	P	66	59	89.4	99	92	93	98	95	93
5週目	Q	45	43	95.6	88	83	86	88	89	88
15週目	Q	45	40	88.9	100	100	100	100	100	98
5週目	R	44	33	75.0	54	57	51	54	51	51

回答率の平均 87.1

webによるアンケート結果

アンケート ト時期	授業題目	受講者 数	回答者 数	回答者の割 合 (%)	Q1	Q4	Q7	Q10	Q13	Q16
5週目	S	78	37	47.4	97	78	95	75	81	92
15週目	S	77	39	50.6	92	79	95	67	82	100
15週目	T	14	9	64.3	100	100	100	89	100	100
15週目	U	138	94	68.1	52	51	58	54	58	56
5週目	V	77	50	64.9	98	96	98	92	98	100
15週目	V	77	49	63.6	100	98	100	96	100	96
5週目	X	96	33	34.4	79	64	82	55	67	79
15週目	X	96	54	56.3	96	82	94	71	89	91

回答率の平均 56.2

まとめと今後に向けての提言

前述の通り、「5週目・15週目アンケート」を実施した大部分の授業で、アクションプランの効果が認められる。しかし、その一方で、「5週目・15週目アンケート」を実施した大部分の授業は、授業開始当初から学生評価が高く、その分、現在のアンケート項目でも明らかにできる改善点は少ない。つまり、授業アンケートが実施されてきたのは、授業改善の必要性の少ない授業であった、とも言える。

その一方で、平成28年度に本学が採択された大学教育再生加速プログラム(AP)事業(卒業時の質保証の取り組みの強化)においてeポートフォリオが整備され、アンケートの実施と集計が容易に行えるようになった。アンケートの実施については、特に集計作業にかかる大きなコストも見逃せない。

また、授業改善アクションプランの実施件数に減少については、必ずしも問題視すべきことではなく、一度経験した教員は授業改善のコツをつかむことができた結果、その後実施する必要性が下がったという事情も考えられる。

さらに、これまでの「5週目・15週目アンケート」のアンケートは授業改善を目的としており、教員にフィードバックされることを意識した質問項目で占められていたが、新しいアンケート(reflective monitoring)の質問項目では、学生が自分自身の学びを振り返ることを主眼に置いたものとなっており、教員の教育力向上だけでなく、学生自身の学びを深めることを重視するという近年の流れに沿ったものとなっている。

これらの状況を踏まえ、次年度以降は、共通教育独自の「授業改善アクションプラン」に替えて、eポートフォリオの機能を利用したアンケートに切り替えて、人的および経済的なコストを削減するとともに、より幅広くアンケートを実施することを提言したい。

IV. FD 部会

文責: 共通教育主管 近藤康生

FD 部会活動

分科会と協力して能動学習の授業への導入支援を行うことを計画した。部会独自の活動はできなかったが、共通教育全体としては、人文分野、社会分野、生命・医療分野、外国語分野、スポーツ健康・分野など多くの分科会においてFD活動が行われた。また、鳥取大学で開催された第66回中国・四国地区大学教育研究会に5名の委員が参加した。

V. 広報部会

部会長 山崎聡

1 本年度広報部会の構成委員

部会長：山崎聡（教育学部）

斎藤昌人（人文学部） 三好康夫（理学部） 森木妙子（医学部） 深田 陽久（農学部）

鈴木啓之（地域協働学部） 前西繁成（TSP）

2 本年度部会の活動方針

広報誌『パイプライン』の発行（年2回）、電子化された『パイプライン』の読まれ方に関する調査を行う。

3 本年度部会の活動報告

3-1) 概要

広報部会活動計画についてメール会議を開催した。

電子化された広報誌『パイプライン』の読まれ方について、当該ウェブサイトへのアクセス数を確認し、分析検討した。

『パイプライン』第52号を12月に発行、第53号を3月に発行（予定）した。

3-2) 部会議事と関連会議事項

- ・第1回部会（メール会議：平成30年8月19日）：議題1『パイプライン』第52号発刊計画および平成30年度活動計画について
- ・パイプライン発行にあたって、52号の発行内容と作業内容を網羅した計画案を作成した上で、編集作業の概要を提示し、承認された。
- ・今年度の活動計画と予算案について諮り、承認された。
- ・特集は、ローテーションにより、分科会「外国語」「日本語・日本語事情」とした。
- ・第2回部会（メール会議：平成30年12月5日）：議題1『パイプライン』第53号発刊計画について
- ・パイプライン発行にあたって、53号の発行内容と作業内容を網羅した計画案を作成した上で、編集作業の概要を提示し、承認された。

3-3) 本年度の審議内容の概要

3-3-1) 『パイプライン』発行業務の自己点検・評価について

- ・例年どおり、『パイプライン』の読まれ方に関して、当該ウェブサイトへのアクセス数の調査を実施した。
- ・今年度は、発行のアナウンスを、グループウェア、KULAS および学生掲示板を通じて行い、より多くの人々に周知するよう努めた。

3-3-2) 『パイプライン』の編集・発行について

- ・第52号を平成30年12月にHPに掲載した。
特集は分科会で、「外国語」「日本語・日本語事情」であった。
教養の頁は、ローテーションに基づき、医学部担当であった。

FD 部会報告

共通教育実施機構委員会から

- ・第53号の編集を行った（発行は3月の予定）。
- ・特集は、「初年次科目」であった。初年次科目授業の感想、意義、受講にあたってのアドバイス等
- ・学生記者(各学部7名 計14名)：原稿400字程度。原稿料1500円（支払書類要）、院生も可。※原稿料は、学生委員会活動に対する謝金という形で支出する。
- ・教員(7名)：各学部1名 原稿800字程度

4 次年度（以降）の課題

- ・昨年からの継続課題であるが、共通専門科目が廃止されたことに伴い、特集のローテーション1ターン分抜け落ちたので、変化に乏しく、ややワンパターンとなる懸念が生じている。この点を鑑みると、編集方針を再考するべき時期に来ているように思われる。
- ・今年度は執筆期限がほぼ遵守され、刊行に大きな遅延は生じなかった。引き続き、『パイプライン』に原稿執筆することの意義を再確認・周知するとともに、意欲的に執筆できるような編集内容（構成）へと高めていきたい。

- ・『パイプライン』アクセス数増加のためには、全学への周知を強化するとともに、新入生オリエンテーションの際に何らかのアナウンスができれば良いと思われる。例えば、アドレスを記載したパンフレットを配布するなど、今後具体的に検討してゆきたい。
- ・上記とも関連するが、大学のポータルサイトからはパイプラインのサイトが発見し辛いように思われ、それがアクセス数伸び悩みに影響していると考えられる。広報の方法を再検討する余地がある。せっかく多くの方々にご寄稿いただいているのに、広く読まれないのは遺憾である。

VI. 分科会報告

1. 大学基礎論分科会

大学基礎論分科会長 大石達良

1. 平成 30 年度カリキュラム編成

「大学基礎論」では大きく〈大学で学ぶとは〉〈社会はどのような力を求めているか〉〈地域社会における高知大学の役割と意義〉を大学初年次の早いうちに認識し、更にコミュニケーション能力、プレゼンテーションスキル等も習得してもらう演習主体の授業という大枠は決まっているものの、具体的内容は各学部任せられ、実施されている。平成 30 年度に実施された各学部のカリキュラムの内容は以下の通りである。

人文社会科学部：

人文科学コース：基本的に前年度の内容を踏襲した。大教室に全員を集め、前半は、大学の学びや各分野の紹介などをテーマとする教員による講義とした。後半はグループディスカッションとし、前半で聞いた講義内容について確認してもらった。授業を通して、人の発言を正確に聞くことと、それを他者と共有することの重要性を学び、かつ大学での学びと、本コースで学べる学問の概要を理解した。

国際社会コース：前半は学生生活を送る上での基本的な情報、大学での学びのための初歩的なスキルについて講義を行った。後半は、少人数のクラスに分かれて1年生のレベルに適した専門的内容の本を講読し、レジユメの作成や発表、議論、レポートを作成するという演習形式の授業を行った。

社会科学コース：10名の教員がローテーション型で、本を読むことを中心とした演習形式の授業を行った。

教育学部

本講義は、本課程の基幹となっている実習系授業の基礎講座として位置づけ、教員養成の基礎となる内容の講義を実施した。「授業科目の主題」を、(1) 教師をめざすモチベーションを持てるようにする、(2) 教師に求められる能力の基礎を理解する、(3) 地域と教育学部のかかわりを理解する、(4) グループ・ワークのスタイルを身につける、と設定している。課題探求実践セミナーの内容とも連動して実施しており、これまで受け身的に学ぶことが多かった学生に、教師になる上で身につけなければならないさまざまな課題について、積極的に考え行動していく機会を与えたと考えられる。

理工学部：

今年度は、まず学生総合支援センターの森田佐知子先生による「キャリアデザイン入門」の講義を行い、学生の将来についての意識づけを行った後、学部長による理工学部で学ぶことの意義についての講義、学外講師による講演3回、副学部長、学科長の4名による4年間を有意義に過ごすための講義を実施した。

各講演の翌週には毎回、6クラスでの少人数グループワークを通して、学びの姿勢の転換、コミュニケーション能力の獲得、社会の中の大学の位置づけ等の認識を促すカリキュラムを編成した。また、残りの講義回ではこれまでの講義内容を踏まえ、グループごとにプレゼン資料を作成し、発表を行い、学生間で相互に評価をした。

講義2回目に行うアドバイザー教員との面談では、アドバイザー教員制度や教員との連絡の取り方の説明とともに、アドバイザー教員が履修・日常生活についての相談を担うことの周知、レポート等における剽窃・盗用に関する注意喚起を通じた早期の倫理教育、英語力の確認・強化をはかるためのTOEIC受験の推奨が行なわれた。また、前半8回の授業のうち4回以上欠席した学生に対して、アドバイザー教員による面談を再度実施した。

医学部：

専門職教育の色合いが濃い医学部では、よき医療人を養成する目的に沿ったテーマに改編するとともに、医学科・看護学科が併設されているメリットを活かし、合同授業として実施している。テーマは「患者さんの視点から見た医療」、「望ましい医療サービス」、「プロフェッショナルリズム」である。授業形態は、各テーマについて「講義 → グループ討論 → 発表」を3クール繰り返した。グループ討論ではクラスを20グループに分けてチューターが指導に当たった。グループ発表は5グループずつ4教室に分かれて実施し、それぞれ1人の教員が担当して授業の運営と評価を行った。最終日には本学を卒業した若手医療従事者2名と学生との対話を行った後、期末試験として最終レポートをまとめさせた。

農林海洋科学部：

農林海洋科学部では、新たに第1講にアカデミックライティング（入門編）を組入れ、まず昨年と同様に3つの基本講義（学部長による「大学とは何か どんどころか／農林海洋科学とはどんな学問か」、学務委員長による「大学でなにを学ぶのか?」、学部教員による「地方大学としてあるべき高知大学」）を受講後、関連テーマを5～6名の班毎に設定し、3グループ計36班に分かれて1回目のグループワーク（5～7講、テーマに即した情報収集・整理、プレゼン資料の準備、報告と相互評価）に取り組んだ。相互評価結果については、グループ毎に担当教員がとりまとめ全員にフィードバックした。なお、第2・3講は物部キャンパスで開講し、第3講にはアドバイザー教員との面談の時間も組入れた。

8～12講では本学部を特色づける主要分野・フィールドに関する話題を「農林海洋科学の基本I～V」として提供し、班毎にテーマを設定して2回目のグループワーク（13～15講）に取り組んだ。全体を通して、講義レポート提出やプレゼン資料作成等における不正・不適切行為への注意喚起や、グループワークにおける義務・責任感の醸成に努めた。

地域協働学部：

地域協働学部の大学基礎論は、高校までの学習とは全く異なる大学での学びについて、次の3つの達成目標を掲げている。

1. 大学で学ぶことの意義と目的を考える。
2. 卒業時に自分がどうなっていたいか、どのような能力をつけるべきかを考える。
3. 社会における大学や学問の位置づけ、高知における高知大学の存在意義について考える。

これらの目標を達成するために、大学基礎論では、学部のカリキュラムを念頭においた4つの人材像に対応しうる方を外部講師（合計8名）として招いた。外部講師のレクチャーと振り返りを通して、大学4年間の学びの在り方や地域を取り巻く情勢について知見を得ることが出来た。また、4月初旬に合宿を行うことで、学生間および専任教員と学生における密接な人間関係の構築を目指すと共に、学びの目標とアクションプランを立てさせている。

土佐さきがけ：

受講生は、グリーンサイエンス人材育成コース、国際人材育成コース、生命・環境人材育成コースの3コースに属する15名で、大学幹部による講義と2回のグループワークとプレゼンテーションを行った。授業目標は、(A) 他者から教わるだけでなく、自身が学びとる姿勢への転換を図ること、(B) 土佐さきがけプログラムの特色と意義、社会が求める力と社会における高知大学の役割と意義を理解すること、(C) グループワークを通じて相手の話をよく聞き理解して、自分の考えを分かりやすく伝える双方向のコミュニケーション力とプレゼンテーション力を向上させる、の3点である。それぞれの講義のテーマは、「大学で学ぶとは（倫理教育を含む）」「地方創生に向けた高知大学の挑戦」、「あなたも国際人になれる」、「私の研究について」である。2回のグループワークでは、「大学での学びのまとめ」と「高知の活性化について」をテーマとした。グループ毎に課題探求の対象を論議し、各々が探求し考察した成果をプレゼンテーションすると共に、全員による質疑応答と相互評価を行った。今年からキャリア教育に関する講義を2コマ実施し、自らの個人目標をレポートとして作成した。

2. 自己点検評価活動について

各学部における自己点検・評価活動については以下のとおりである。

人文社会科学部：

3コース間で内容が異なるが、3コースともに担当者間での自己点検評価活動が行われている。人文科学コースでは、講演者・ディスカッションリーダーなど授業を担当した教員が授業の概要、学生の取り組み具合、問題点や今後の反省点、などについての報告書を作成し、後述のFDの材料とした。

社会科学コース、国際社会コースでは、15回目に学生に授業アンケートを実施した。

教育学部：

昨年同様に、学生へのアンケートによる授業内容の意見聴取を実施した。

また、以下のFD活動にも述べるが、授業終了後アドバイザー教員13人全員を集めて授業内容や課題、学生のレポートによる達成度等について意見交換を行い、報告書にまとめた。

理工学部：

昨年と同様に、学生との動向を把握するために、アドバイザー教員との面談を講義2回目に実施し、昨年同様に出席状況をKULASに入力し、出席状況を共有することにより欠席者への

指導を丹念に行った。また、前半 8 回の授業のうち 4 回以上欠席した学生に対しては、アドバイザー教員による面談を再度実施した。そして第 15 週目に授業評価アンケートを行った。平成 31 年 1 月 7 日に開催された理工学部・理学部内部質保証委員会において、授業評価アンケートに基づいて点検が行われ、次年度に向けての改善点等が検討された。

医学部：

プロフェッショナルリズムについて考えさせるテーマで使用するトリガービデオの内容を、終末期医療で問題になっている「胃瘻」を中止すべきかどうか考えさせるテーマに変更し、看護学科の学生も同じ医療人として社会的・倫理的な問題に取り組ませることができた。

大学基礎論自己分析アンケートの集計結果ならびに授業評価アンケートの結果から、本授業は学生からの評価が高いため、現在のやり方を踏襲して良いと考えている。

農林海洋科学部：

授業評価アンケートを実施し、アカデミックライティング（入門編）については高い評価が得られたことから、次年度も実施することとした。

地域協働学部：

授業改善アクションプランによる 5 週目アンケートを経てアクションプランを提示し、授業改善をおこなった。授業実施者は 6 名体制で授業ごとにピュア・レビューが行われている。履修者 60 名であることから個別のフォローは十分に行えた。「大学基礎論」では学部が掲げる 4 つの人材像に合わせた 8 名のゲストを招聘し、学生 60 名と議論を行う形態をとった。15 週目アンケートの結果からも、グループワークや学生がインタビューする形態が評価された。アンケートでは、ゲストピーカーに関するポジティブな意見が多くみられた。よって「大学基礎論」で掲げた達成目標 3 つ（①大学で学ぶことの意義と目的を考える。②卒業時に自分がどうなっていたいか、どのような能力をつけるべきかを考える。③社会における大学や学問の位置づけ、高知における高知大学の存在意義について考える。）をクリアしているといえる。また、本年度の特徴として学部が掲げるロールモデルから学ぶことの意義についてキャリアデザインがご専門の森田佐知子先生（学生総合支援センター）にご協力頂き、授業の動機付けが十分に行われた。さらに 15 週目には知識の習得と自己理解を目的として、再度森田先生にご協力頂き今後の授業がキャリアデザインへ接続することへの示唆もあった。森田先生には学部専任教員と連携して授業の内容から打ち合わせから入って頂いた、キャリアデザインの専門的な見地から学生指導に入ったことは授業の学びを深めることに繋がったと考えている。

土佐さきがけ：

授業の進行並びにカリキュラム全体の進行と調整は、国際人材育成コースの前西を中心として各コース教員が協力して行うことができた。グループワークにおいては、昨年度把握された課題に基づき、進め方の改善を行い、個人及びグループのレベルで、より改善した結果が得られた。結果として、全体の満足度も高まったと思われる。学際的領域横断的に探求の対象として活かすことは引き続き今後の課題である。

3. FD 活動等について

学部における FD 活動については以下のとおりである。

人文社会科学部：

3 コース間で内容が異なるが、3 コースともに担当者間での FD 活動が行われている。

人文科学コースでは、11 月のコース会議前に、コース構成員全員で FD を実施し、本年度の課題を検証するとともに、それを踏まえた次年度の計画を策定した。

国際社会コースでは、FD ミーティングの中で、大学基礎論に関する課題の検討がなされている。今年度は特に、修学に困難を抱える学生について話し合われた。また、大学基礎論および学問基礎論全体の授業構成についても検討を加え、検討内容を来年度の授業構成に反映した。

社会科学コースでは、8 回目と 15 回目の終了時に担当者 FD を開催し、授業内容、授業方法等について話し合われている。

教育学部：

授業開始前の 3 月に、担当教員による FD 会議を開催し、本年度の授業計画に関する確認及び修正、仕事分担の確認等を行った。さらに、全授業終了後 8 月始めに、教員による FD 会議を再度開催し、今年度の成果と課題、来年度への展望を検討した。学生アンケートや教員の意見からは、教員になることを目指している学生にその基礎知識を学ばせるという目的は十分に達成できたと考えられる。一方、大学や学問の位置づけ、高知大学の存在意義、議論や合意形成の手法の習得についてはまだ手薄感があったとした。

理工学部：

演習クラスにより担当教員が異なるだけでなく、同じ演習クラスでも複数の教員が担当していることから、大学基礎論の取りまとめを行なっている福間学務委員長を中心に各担当教員間の意思疎通をはかり、スムーズかつクラス間で差が生じないよう公平な授業運営を心がけた。

医学部：

5 月 8 日（火）と 10 日（木）の 18:00~19:00 まで大学基礎論チューター研修会を開催し、担当チューターのファシリテーション力向上を促した。また、授業評価アンケートの自由記載欄に目を通し、授業計画の改善策を検討した。コメンテーターに対する FD は実施できなかった。

農林海洋科学部：

担当教員で積極的に意見交換を行った。また、講義内容を充実させるために、講義改善策の提案、改善意識の向上を図った。

地域協働学部

毎回の授業で地域協働学部教員（複数名）によるピア・レビュー、授業参観によって本授業の FD を行った。授業に関する分析と教育効果の検証を随時確認してきた。本学部は新設学部であるため、授業計画も内容も時間をかけて試行錯誤し、授業を良くしていく必要がある。完

成年度となる本年度でこの授業内容を見直し、本学部カリキュラム改革部会と連携して授業改善が行われている。

土佐さきがけ：

カリキュラムの内容は、授業前の運営委員会で全員の確認を得て進めた。今年からキャリア教育を2コマ実施し、学生の学修成果について意見を聞くことができた。また、グループワークを行った1グループが9月に九州大学で開催された学際教育交流セミナーにおいて「高知県の人口減少について」と題した発表を行い、質疑応答に対応した。

2. 課題探求実践セミナー分科会

課題探求実践セミナー分科会長 藤岡正樹（地域協働学部）

—カリキュラム編成活動—

1. 平成 31 年度カリキュラム編成の経過

学部開講課題探求実践セミナーについては各学部へ依頼し、それ以外のセミナーについては各担当者に授業実施を依頼した。

平成 31 年度開講授業題目

人文社会科学部開講セミナー 8 題目

教育学部開講セミナー 1 題目

理工学部開講セミナー 3 題目

医学部開講セミナー 2 題目

農林海洋科学部開講セミナー 1 題目

地域協働学部開講セミナー 1 題目

地域協働入門 1 題目

自由探求学習 2 題目

学びを創る 1 題目

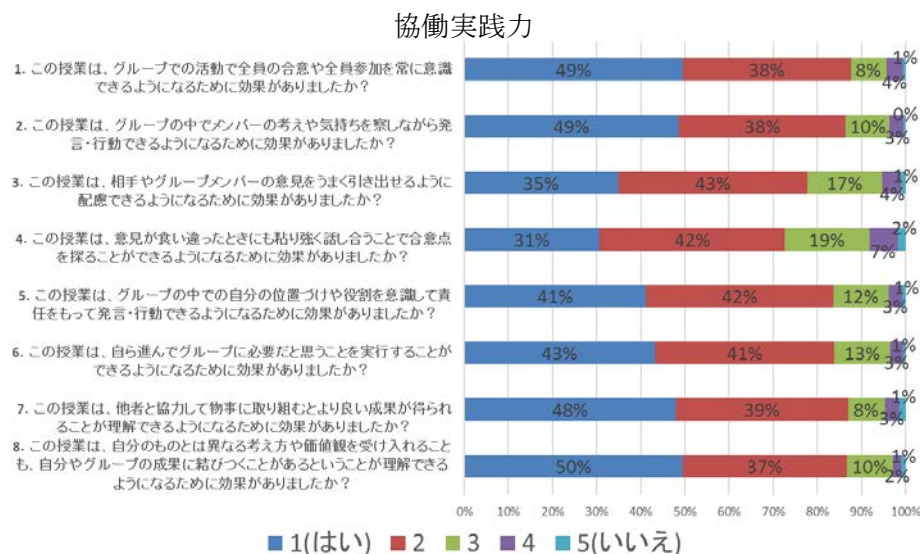
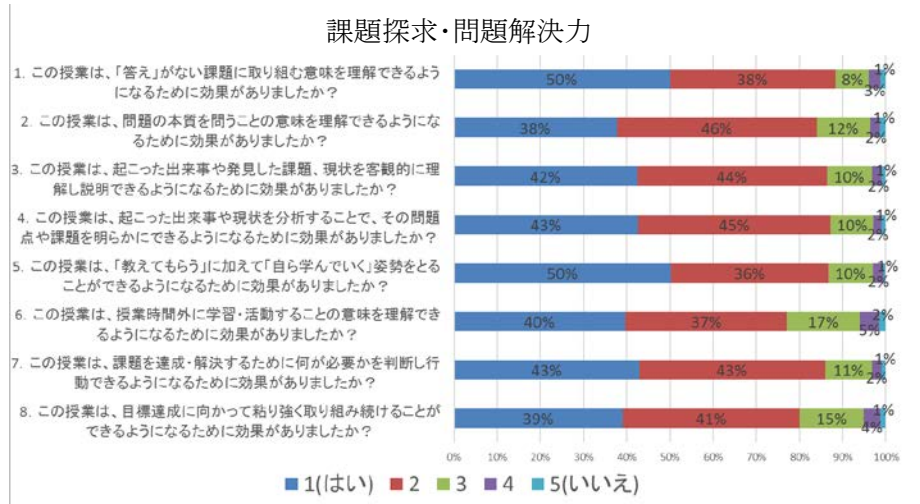
国際協力入門 1 題目

(※定員は授業ごとで異なる)

2. 平成 31 年度への課題

平成30年度オープンクラスとして開講してきた3題目がH31年度は開講しないこととなった。全クラス総定員では全学生の受入は可能とはなっているが、履修上の自由度が低くなる可能性がある。これら課題を解決するためには、学部・学科定員に関する総合的な再検討が必要となる。平成31年度では、担当教員が実施しやすく、かつ学生にとっても履修しやすいようなカリキュラム編成となるよう努力したい。

平成 30 年度に開講された課題探求実践セミナー全 23 題目中、21 題目について受講学生による授業評価（アンケート）が実施された。下図に、回答者全 1,016 名のアンケート集計結果を示す。



評価が高い（1 もしくは 2）と回答している割合が「課題探求・問題解決力」で、平均約 84%、「協働実践力」で平均約 83%であり、また、項目ごとの大きなばらつきもなく、全ての項目において、70%を超えていることから、両評価分類ともに高い評価が得られているといえる。

課題探求実践セミナー分科会では、社会分野分科会と合同で下記、FD 企画を実施した。本年度は、外部 FD への参加を予定していたが、課題探求実践セミナーでは、授業内容が多義にわたること、ワークショップを含む授業が含まれることから、来年度以降の当分科会での FD のあり方を検討するために、下記 FD 企画を実施した。

テーマ：FD 企画 地域におけるワークショップ実践例の共有

「地域におけるワークショップ実践例の共有」をテーマとし、正課・正課外でのワークショップ実践例を振り返りながら、課題点を議論した。

□地域実習・演習におけるワークショップ実践例

地域実習・演習によるワークショップを例示しながら、各種ワークショップの手法について議論が行われた。正課/正課外によるワークショップ手法の違いや、ファシリテータが教員・学生の場合の進行の違いなどが議論された。また、各種アイスブレイクの事例と効果および課題について議論が行われた。

□フリーディスカッション

フリーディスカッションでは、ワークショップにおいてプレイバシーや人権に関わる内容や商品・サービスのアイデアに関わる議論では、情報の公開性に留意が必要であることが議論された。

以上、本試行により活発な議論が行われたことから、各授業で行われたワークショップ事例を題材とした FD 活動が有意義であると考えられ、来年度以降の FD 活動の参考としたい。

3. 学問基礎論分科会

学問基礎論分科会長 河野俊夫

1. カリキュラム

人文社会科学部では、①「哲学・思想入門」「心理学入門」「日本史入門」「外国史入門」「地理学入門」「日本語学入門」「日本文学入門」「英米文学・英語入門」、②ミニ・ゼミナールを通じて、文献を読み、レジュメを作成し、発表・議論し、レポートを作成するという大学での基本スキル、③「なぜ人は動かされてしまうのか」の原理を理解し、実際の企業の行動や自身の体験などに当てはめて、思考する幅を広げる、④多文化社会を考える、④経済学的思考、⑤基本判例を抑えつつ、公務員試験過去問を解く、⑥ゲーム理論やマイクロ経済学の入門的なトピックを理解する。また、簡易なモデルを用いて現実を描写する、⑦身近な水産物（エビ）を通じて、先進国と途上国の関わりを考える、⑧政治分析の入門、⑨「食」（ものを食べること）をとおして社会をみつめる。「食」を通して国際情勢を考える、⑩企業や組織について経済学の観点から理解する。学んだ経済学的な考え方を用いて実際の企業や組織における様々な事柄を説明できるようにする」など、多彩な内容で学問基礎論を実施した。

教育学部では、①学問の魅力、学ぶ意義を明らかにし、学びの展望を構築する、②講義とグループワークを通じて、聞く力、読む力、思考力、表現力などを養う、③演習形式で少子化社会・格差社会のもとでの教育問題を考える、④「児童生徒から信頼される教師とは一カウンセリング心理学の知見を踏まえてー」、「四国鉄道創業史によせてー地域教材の一例としてー」、「共に生きる海洋生物の研究と海洋教育」、「特別支援教育の学問的基礎」、「美術・デザインのいろはと発想法」、「ライフスタイルを考える」など、学問の意義を確認しつつ、具体例にもとづいた分析により、学生の思考力の向上に務めた。

理工学部では、数学コースにおいて

- ・数列の収束など解析学における極限の概念に関連する課題
- ・データの処理や推定量の挙動の検討などの統計学に関連する課題
- ・多面体や曲面などの幾何学に関連する課題
- ・整数論や方程式などの代数学に関連する課題
- ・代数学を学ぶ指針として、合同ゼータなどの少し高度なトピックに関する課題
- ・大数の法則を題材にした確率論の課題
- ・微分方程式、フーリエ解析、微分幾何のいずれかに関連する課題

の具体的課題を通じて学生の基礎力を養成したほか、物理科学コースにおいては、素粒子・原子核物理学、宇宙線・電磁物理学、物性物理学、物性化学ではどのような内容を学ぶのか、基礎的に重要になる概念などについて平易な解説を行ったあと、グループ学習による質疑応答を通じて、より深い理解へと学生を導いた。コンピュータ科学に関する学問基礎論では、2進数、機械語、論理回路、Webシステム、ユーザインタフェースをキーワードとして、コンピュータのハードウェアの仕組み、情報システムの役割、インタフェースデザインのあり方について学生の理解力を高める指導を行った。生物科学に関する学問基礎論では、生物学、植物分類学、海洋生物学、植物生態学、理論生物学、古生物学、比較生化学、動物生理学、細胞生物学をキーワードとして、高校で学んだ生物を基礎として、より専門的な学術背景を踏まえた理解力を鍛える指導を行った。化学・生命理工学の学問基礎論では、①構造生物学、タンパク質結晶学、生理活性物質と生体高分子の相互作用研究、②分析化学、環境モニタリング、機器分析に関する

内容、③糖鎖工学，タンパク質工学，ケミカルバイオロジーに関する内容、④無機化学，錯体化学，材料化学に関する内容、⑤有機化学，光化学，超分子化学，材料化学に関する内容、⑥無機材料科学，結晶化学，セラミックス科学，水熱科学に関する内容、⑦海洋動物の幹細胞システムを制御する分子メカニズムの研究、⑧有機化学，有機金属化学，触媒反応に関する内容、⑨酵素タンパク質の分子進化，構造機能相関に関する内容、⑩金属ナノ粒子触媒・光触媒化学，物理化学（今村）に関する内容、などについて各教員のこれまで培ってきた知識、経験、哲学をもとにした講義を実施し、初年次からの意識づけや、研究に関する興味や関心を持たせる指導を行った。地球防災環境科学に関する学問基礎論では、地球表層環境，地球史，自然災害メカニズム，減災・防災技術をキーワードとして、災害に強いまちづくり、山地から沿岸地域の土砂の移動、施設や建築物の安全性、震源破壊過程と地震動、堆積層の形成と変形、地震に伴う地殻変動や電磁気現象、災害をもたらす気象、岩石学・鉱物学分野の概要、掘削科学の利点と広域地質との連携など、学問分野の概要や最近のトピックスを紹介した講義を実施し、グループ学習によって学問分野の方法論や表現方法の理解力を高める指導を行った。

農林海洋科学部では、学生自身が普段から関心をもって接する農学、農林業、食糧生産、自然環境、地域農業に関する内容、生命科学の諸現象の解明と環境保全を念頭に置いた循環型の生物資源の生産と利用の全体像、高知県における生物資源の利用と保全の現状、高知県と海洋（特に水産）分野との係わり合い、海底資源環境・海洋生命科学に関する内容などについて教員からの話題提供を受けたあと、グループ学習を中心軸に据えて学生自ら課題を設定し、その解決法等について考えさせる指導を行った。

地域協働学部では、①地域社会を理解するための基礎となるコミュニケーション力、共感力、関係性理解力、情報収集力、状況判断力、読解力を身につけることを目標として、グループ学習による実践的なトレーニングを通じてその能力の向上に向けた指導を行った。

土佐さきがけプログラムでは、化学・生命理工学という広い学問分野を知るための一般的知識の醸成を目指してグループワークによる授業を実施し、レポート作成法の具体的指導を通じて、今後、大学で学びかつ社会へ出た際に必要となる知識・考え方・心構えなど修得させたほか、生命・環境人材育成コースの学生に対しては、与えられた課題に対して、自ら調べて理解し、考察することによって、学習力、考察力、伝達力を身につけるための指導を行った。

医学部では、人間の行動を科学的に理解し、健康の維持，増進のための視点を学習することをテーマとして、脳の働きと基本構造、記憶の仕組み、学習の仕組み、感情の仕組み、慢性疾患患者の行動変容、禁煙の行動変容、疫学の知識を応用した行動変容の仕組み、睡眠の仕組み、ストレスの仕組み、精神の障害と脳の関連、人工知能とその応用など、医学の基礎である行動科学について学ばせる講義を実施した。

2. 自己点検・自己評価

本年度は当初、e-ポートフォリオを活用して学生の授業アンケートを実施して、学問基礎論の実施状態の、学生の視点にもとづいた点検・評価を行う予定でいたが、学部によっては実施形態が複雑なため調査が困難になることが明らかとなったため、代替措置として、moodle システムを活用して授業アンケートを実施した。

moodle システムを活用した授業アンケートは、学内からのアクセスのほか、学外からも PC およびスマートフォン等の情報端末から回答できるように設定されている。

授業アンケートの具体的内容を次に記す。

(アンケートの目的)

このアンケートは、全学で実施している学問基礎論において、受講学生の視点から高く評価されている授業のポイントに関する情報を収集し、これを全学部で共有して、来年度の学問基礎論の授業改善に役立てる目的で行うものです。

その主旨を理解したうえで、授業改善への協力活動として、建設的な回答をお願いします。

質問項目は全部で 15 項目です。

自由記述欄にも、可能な範囲で回答してください。

1. この授業は、自身の勉学の方法論を学ぶ上に役立っていると思いますか？

①はい ②どちらかという、はい ③どちらかという、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)

2. 知的好奇心や意欲関心が高まる授業と感じますか？

①はい ②どちらかという、はい ③どちらかという、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)

3. 理解が進むような講義形式になっていますか？

①はい ②どちらかという、はい ③どちらかという、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)

4. 配布資料や教材に工夫が感じられますか？

①はい ②どちらかという、はい ③どちらかという、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)

5. グループ学習による効果は、この授業で感じられますか？

①はい ②どちらかという、はい ③どちらかという、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)

6. テーマの設定は適切だと感じられますか？

①はい ②どちらかという、はい ③どちらかという、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)

7. 課題レポートの作成では、授業で行った内容が参考になっていると感じますか？

①はい ②どちらかという、はい ③どちらかという、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)

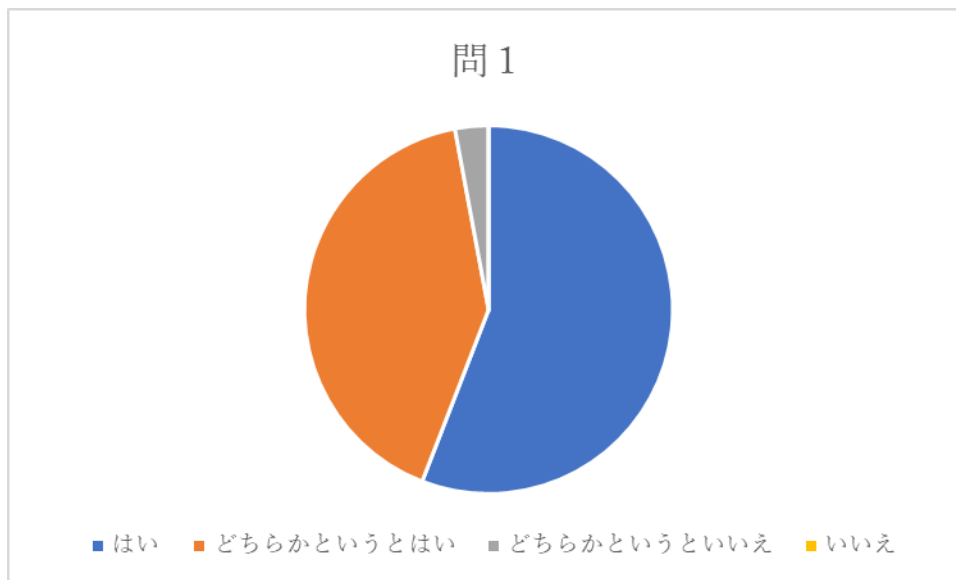
8. グループ学習の際に、積極的に発言しようと意欲が湧きますか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)
9. プレゼン資料の作成方法について、この授業では適切なアドバイスが得られていると感じられますか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)
10. 授業に関連する資料を調べる際の調査方法について具体的なアドバイスが得られていると感じますか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)
11. 提出した課題レポートに対して授業担当者からのコメントは十分に得られていると感じられますか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)
12. 他の授業とも比較して、この授業の準備には時間がかかると感じていますか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)
13. この授業でのグループ学習で、他者との対話を通じて物事を多面的に捉えることが重要であると感じましたか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)
14. 授業内容の時間配分は適切であるように感じますか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)
15. グループ学習での構成人数は適当であると感じますか？
①はい ②どちらかというと、はい ③どちらかというと、いいえ ④いいえ
その理由を以下の欄に記述してください。(記入は任意です。最大 200 字まで)
16. その他、この科目を受講して良かったと感じたことについて記入してください。
(記入は任意です。最大 300 字まで)

アンケート調査対象の受講学生数は全学で 1,103 名、調査の結果、最終回答(後期試験最終日 2 月 6 日 〆切)数は 488 名(回答率 44.2%)であった。この回答データをもとに、学部で検討したアンケート調査の分析・総括結果を次に記す。

(人文社会科学部)

〈アンケート結果〉

1. この授業は、自身の勉学の方法論を学ぶ上に役立っていると思いますか？



はい 57名

- ・プログラム選択をする二年生になる前に学問基礎論の授業を受けたことでその選択の参考にできたから。
- ・毎回課題が出され、それによって具体的に学べたのではないかと考えるから。
- ・日本史を学びたいと思っているため、今回の学問基礎論での授業で、日本史に対する姿勢や学び方を学ぶことができたから
- ・自分の学びたい分野をより知ることができると思うから。
- ・今までは勉学の方法がわからずただやみくもにしていくやり方しか知らなかったが、方法論を学ぶことにより、より整理しながら学んでいくやり方を知ることができるようになったから。
- ・興味ある分野について入門的に学べると思った。
- ・私は興味を持っている分野について、大学で初めて学んでいるので、方法論から学べて今後役に立つと感じているからです。
- ・小説を読んだとき、疑問を持つことが重要だと分かったから。
- ・大学での学びの方針や方法を学べるから。
- ・レポートの書き方や大学生活に基盤についてくわしく学べたから
- ・プレゼンテーションなど、文章をまとめたり、考察する練習ができたから。
- ・ただ講義を受けてテストをするのではなく、自ら課題を見つけ、解決に向けて行動をすることが実践的に学べるためです。

- ・自分が経験した事が実は行動を起こした原理というものがあり、自分がその原理に動かされていることを知れた。これからの生活に役立つものだと感じたため。
- ・あるテーマで本を読んで、他の学生に発表したり、発表内容から質問したりすることでもっとそのテーマ具体的に理解することができるようになる。
- ・マイポートフォリオの記入などで、目標が明確になり勉強すべきことがはっきりするから。
- ・専門科目の選択について、参考になった。
- ・読んだ本がすごく興味のある分野で興味を持って授業に取り組めた。

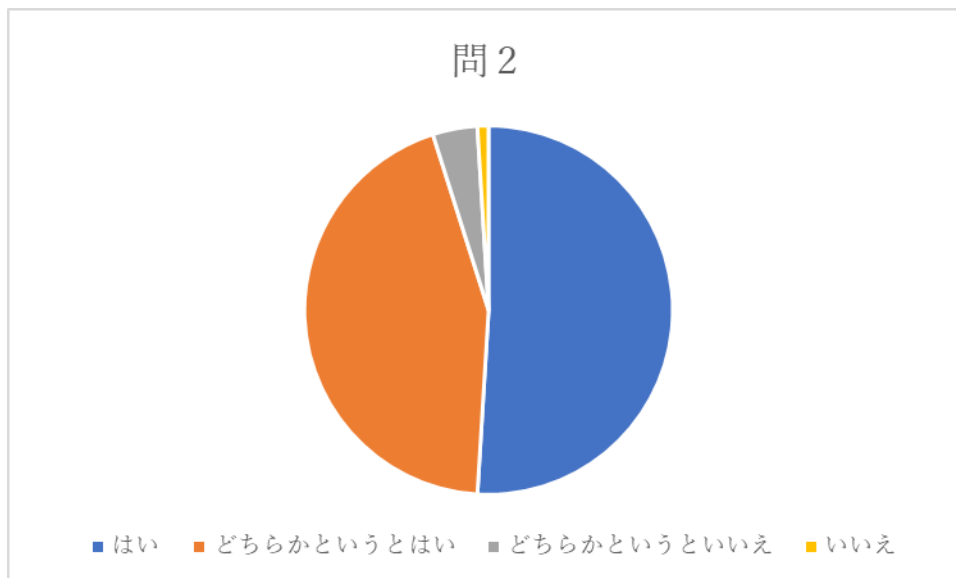
どちらかという、はい 42名

- ・興味のある分野のことを知ることができるから
- ・秋セクションと冬セクションとで分かれていて、自分の学びたい学問だけでなく、もう一つ選べるのが、良かったです。
- ・各分野でどのような研究が行われているか何となくイメージできた
- ・今まで知らなかったことや大学を有効活して学びの幅を広げることにつながっていると思うから。
- ・講義を行っていてやりたいこととは少し考えがずれているがためになるものも多いから
- ・1章ずつしっかりと考察して本を読むことで、自分の考え方が変わり、それにより自分の行動も良い方向に変化したと思うからです。
- ・レジュメの作成や発表は役に立つと思うから。

どちらかという、いいえ 3名

- ・習得するには回数が少なすぎる
- ・別に方法論を学んでいるように感じないから。

2. 知的好奇心や意欲関心が高まる授業と感じますか？



はい 52名

・オムニバス形式の授業で広範囲のことを学んだため、より深く学びたいという意欲がわいたから。

・興味のある分野を体験できるから。

・自分の興味のある分野を、出された課題プラス α で調べていくことができたから

・自分の興味のある分野について学べるから。

・自分が興味を持ってこなかった範囲の分野にも触れることができ、より様々なことに目を向けることができるようになったから。

・先生にもよるが、やはりやりたい分野ができるのは必然的に知的好奇心や意欲関心が高まるものだと思う。

・今まで知らなかった知識や物の見方を学び、とても興味深いと感じているからです。

・普段、本を読む習慣がなくても、本を読む機会が増えるから。

・大学でのこれからの学びについて展望が持てるから。

・自分が何について興味があるのか、どのような分野の課題を解決したいのか、等が全体を通して見えてくるため

・多くの知らないことを知ることが出来たため、他にも知りたいと思うようになった。

・ある課題を様々な視点から見て、みんなで話し合うのが知的好奇心や意欲関心が高まっていたと思います。

・本を読んで内容をまとめたり、意見を発表したりして、他の人の話も聞けて楽しかった。

・みんなが質問をしてくれたので楽しいゼミだった。

・気になったことをみんなで意見を出し合え、新しい視点を見つけられるので。

どちらかというと、はい 45名

・前半と後半で違う分野のことを知ることができるから

・自分の将来を考えるきっかけとなるから

・自分が知らなかったことが増え、それについて探求しようと思うようになった。

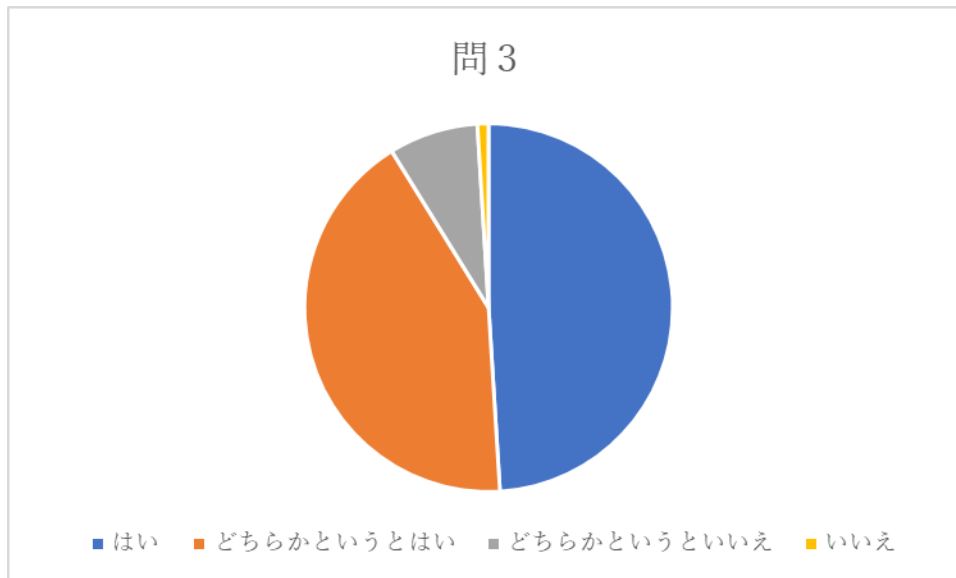
・最初は興味がある分野ではなかったからあまり意欲がなかったが、授業を受けてみると興味が湧いてきたから。

・他者の発表を通じて今まで知らなかったことや考えても見なかったことを、学ぶ機会があり、関心の幅が広がったと感じるから。

どちらかというと、いいえ 4名

いいえ 1名

3. 理解が進むような講義形式になっていますか？



はい 50名

- ・自分が読んできた内容と他の人のレジュメのまとめ方を比べたり、疑問点を上げるのは理解につながっていると思う。
- ・多方面から物事が見れる、またはそのことに気づかせてくれる。
- ・ひとつのテーマについて学ぶ講義数が少なく、重要なことを凝縮して勉強できるから。
- ・分かるように細かく説明があるし、確認も行ってくれるから。
- ・理解が難しい場合、担当の先生がヒントを与え、ただ答えを教えるのではなく、自ら解決するように導いてくれるため
- ・初めに自分で本を読みそれをまとめ、発表し、グループでも同様のことをし理解が進む形になっていると思った。
- ・質問したら、納得するまで回答してくれたりするので理解が深まる。
- ・発表者も質問者も意欲的だった。
- ・ゆっくり説明してもらえるから。

どちらかという、はい 43名

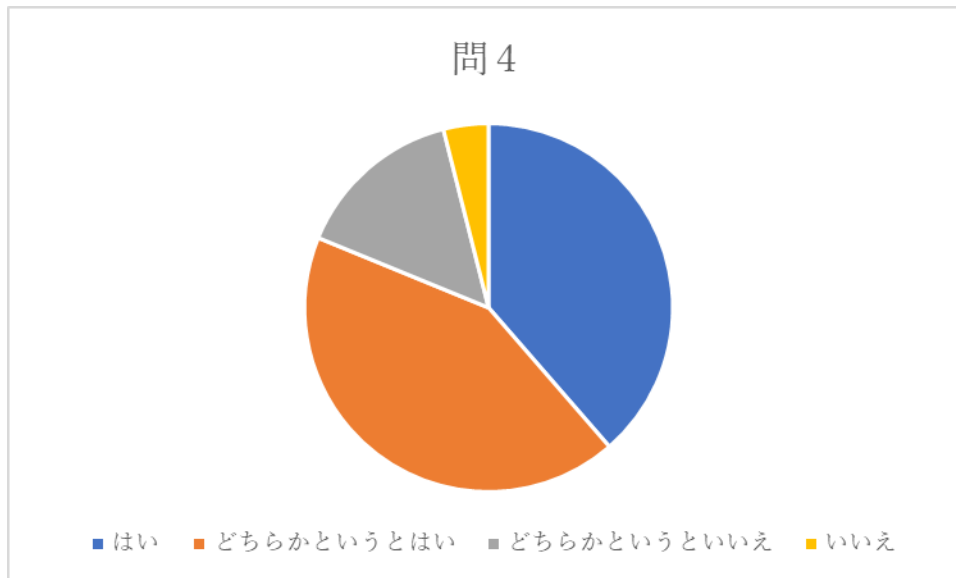
- ・専門的な内容ばかりで難しいと思うことはなく、分かりやすかったです。
- ・もともと頭はいい方ではなくついていけない部分もあるが、考え方で内容は捉えられるようになっているのでそういう形式になっていると思う
- ・だいたいのことは理解しながら講義を聴くことができるが、時々内容の難しさについていくことができなくなることがあるから。

どちらかという、いいえ 8名

- ・時間が短い
- ・自分の読んでいない書物の話だと、納得のいていない状態でも講義が進んでいくから。
- ・あまり関連のない講義もあったから

いいえ 1名

4. 配布資料や教材に工夫が感じられますか？



はい 39名

- ・自分たちにも親しみのわくものを教材として持ってきてもらえたから。
- ・特に哲学・思想入門の授業での、古典100選の資料が印象に残っています。とても興味深く、どのような書籍を読めば良いのか知ることができて、良かったです。
- ・教科書が興味を持てるような面白い本だったから。
- ・複数の資料を提示して1年でも分かるような工夫がされているように感じる、
- ・先生が、大事だと思ったことを書き加えて印刷しているから。
- ・個々オリジナルの資料だったので毎回見るのが楽しみだった。

どちらかというとはい 43名

- ・これからその分野に進む上での取り組み方が示されていたからわかりやすくまとめてくれていたから。
- ・パワポを作った人によって個人差があるが、たくさん工夫されていると感じた。
- ・あまり配布物はなかった。

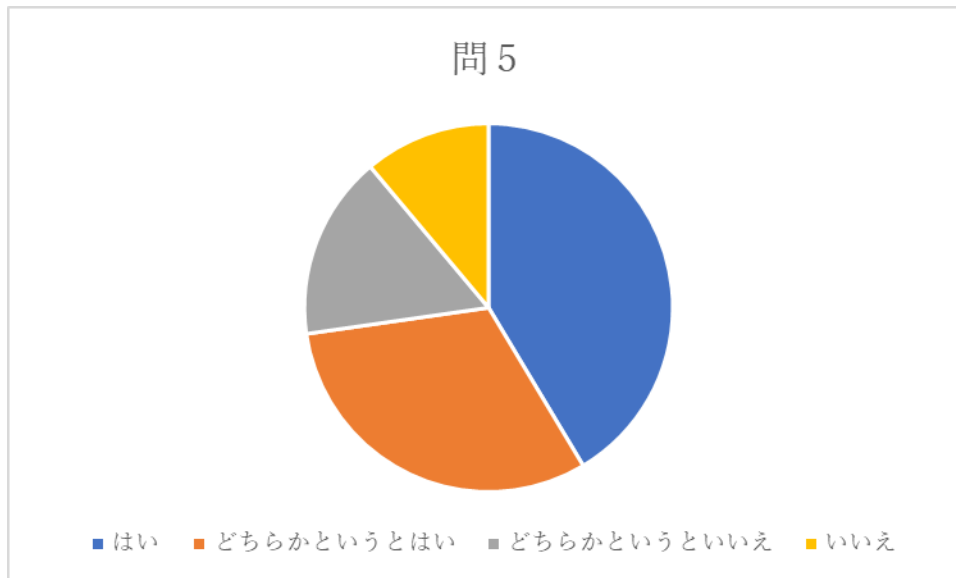
どちらかというといいえ 15名

- ・教材や資料はまだすこししかもらってないし、そのもらったものもコピーだったのでなんとも

いいえ 4名

- ・あまり感じられなかったから

5. グループ学習による効果は、この授業で感じられますか？



はい 41名

- ・話し合う機会が多かったので効果はあったのかなと思った。
- ・様々な人の意見を聞けるから。
- ・役割分担などの重要性を感じたから。
- ・ミニゼミで他人の意見を聞き学ぶことができたから。
- ・今まで本を読んで学んだことをさらに詳しく学ぶことが出来るので良いと感じた。
- ・活性化していたと思う。
- ・パワーポイントを作ったりすることや意見を話し合うことが向上しやすいと思ったから。
- ・自分だけでは理解の進まなかったことを確認でき、他の意見を取り入れながら認識を深めることができるから。
- ・一グループの人数が多く、さまざまな意見が聞けるから。
- ・一人で学ぶのではなく、グループで議論したり、課題を設定し調べる事は、視野が広がり、新たな視点を得ることができた

どちらかというとはい 31名

- ・グループで意見を交換し合う事で、思いつかなかった事から新たな考えが生まれたり、意見の確認もできていたからです。

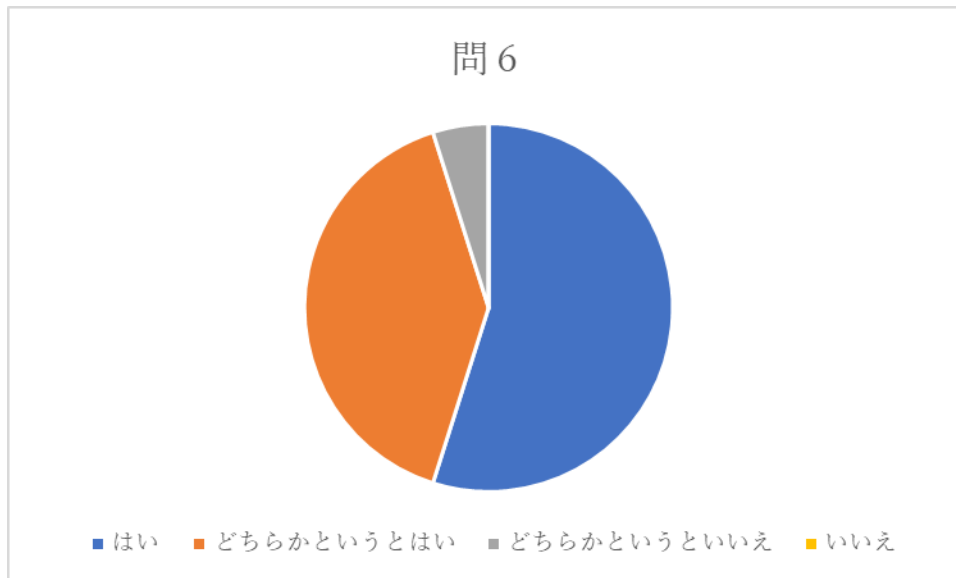
どちらかというといいえ 16名

- ・グループ学習をまだしていないから。
- ・グループワークは一度しかしていないため
- ・グループ学習はほぼなかった
- ・グループで話し合う機会があまりありませんでした。

いいえ 11名

- ・全くなかった
- ・これから自分が進む分野を決めるために重要な材料なのでじっくり考えたかったから

6. テーマの設定は適切だと感じられますか？



はい 56名

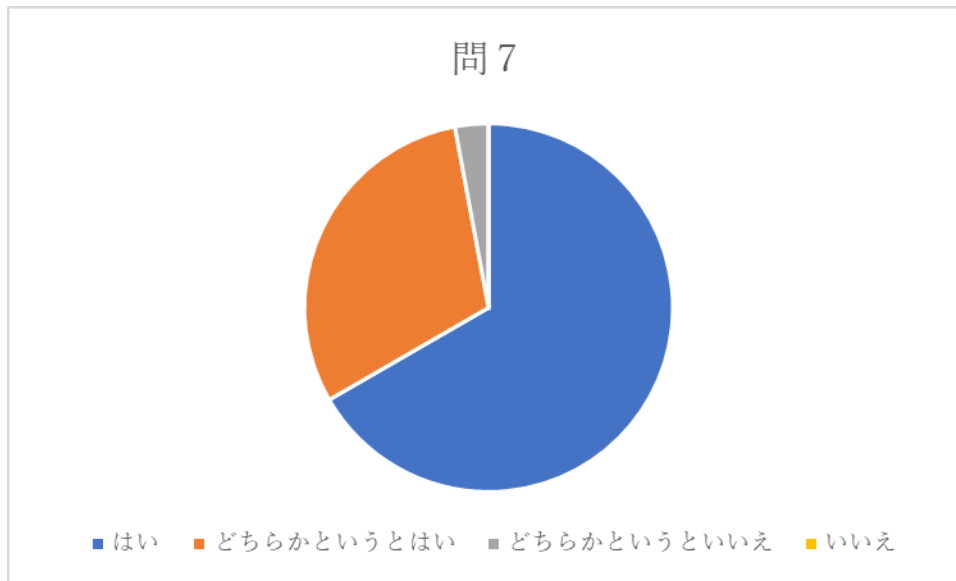
- ・面白く、新たな発見があったため。
- ・興味のある分野だった。
- ・今まで知らなかったことをたくさん学べたから。
- ・エビと経済など考えたこともなかったため

どちらかというとはい 41名

- ・おおまかなテーマで難しすぎず、簡単すぎず良かった
- ・様々なテーマで更に興味が広がったからです。
- ・自分ではいいのかな？という自信のなかったが、先生がいいんじゃないとおっしゃるので多分そうなのだと
- ・時々、なんの意味があったのかわからない講義があるから。

どちらかというといいえ 5名

7. 課題レポートの作成では、授業で行った内容が参考になっていると感じますか？



はい 68名

自分で調べたことを書くから

授業で行った内容の復習のような形式の課題レポートだったので、授業内容を思い出しながらできました。

授業での資料探しや、疑問に感じた事を話しあった事はレポート作成の際に参考になると感じたからです。

前期にやったレポートがとても参考になっています。

ほとんどの課題レポートは授業を振り返らないと進めることができないから。

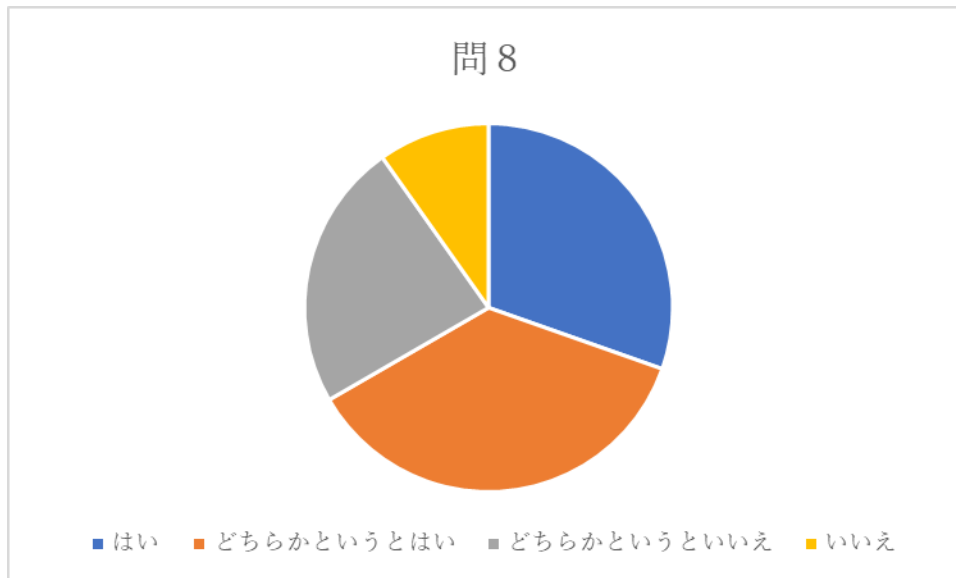
学んだことを元にするので、合っていると感じた。

先生の発言が、レポート作成時のヒントになっているから。

どちらかというとはい 31名

どちらかというといいえ 3名

8. グループ学習の際に、積極的に発言しようと意欲が湧きますか？



はい 31名

- ・じぶんも発言しないとグループ学習ではないとおもうから。
- ・発言内容をあらかじめ課題として考えてくるから。
- ・自分の意思を伝えないとグループ学習にならないと考えているため

どちらかというとはい 37名

- ・グループの人数が多すぎなかったので、発言しやすかったです。
- ・比較的少人数だという事もあったからです。

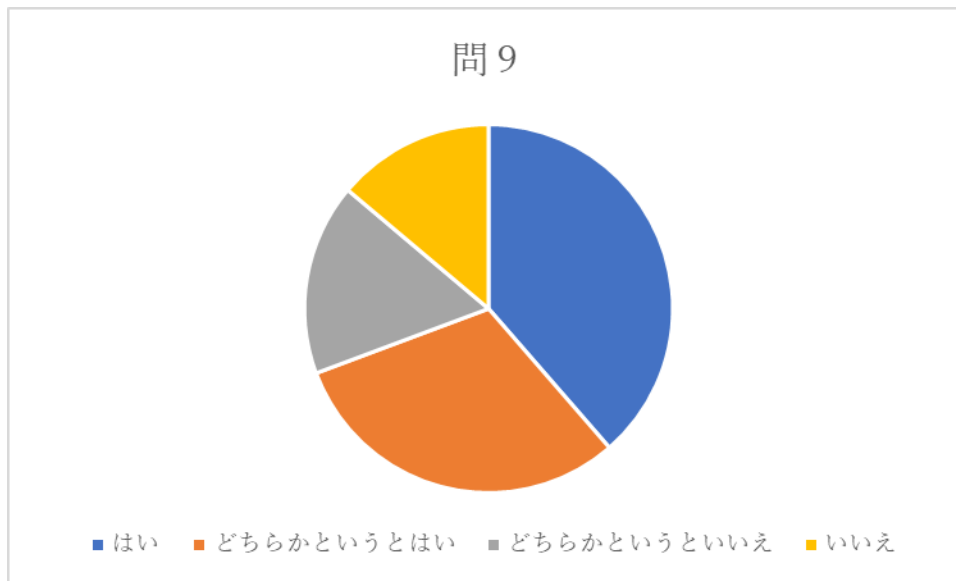
どちらかというといいえ 24名

- ・人見知りがまだ取れないため
- ・もともと積極的に発言するタイプではないが、テーマによっては意欲がわいたものもあったから。

いいえ 10名

- ・グループ学習がなかった
- ・グループ学習をしていないため

9. プレゼン資料の作成方法について、この授業では適切なアドバイスが得られていると感じられますか？



はい 39名

- ・丁寧に説明してくださり、その上過去の資料も見せてくださったので
- ・教官は毎回発表内容について詳しく良否を説明してくれていると思ったから
- ・アドバイスを受けたことで、自分のとても低かったプレゼン資料が、当日までには良くなっていたからです。
- ・ヒントを多く与えてくれるので、修正しやすく、わかりやすい

どちらかというとはい 31名

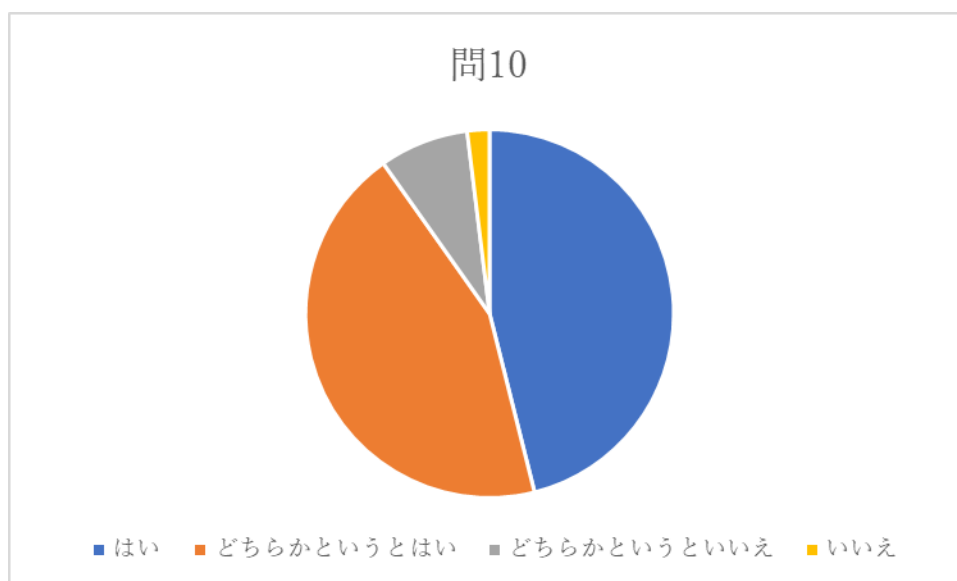
- ・文字やフォントや色を統一性を持たせることが人間心理として大きく印象に残ると学べたから。

どちらかというといいえ 17名

いいえ 14名

- ・なかった
- ・プレゼンは一度もしていない
- ・プレゼン資料の作成方法については触れられなかったと思います。
- ・プレゼン資料を作成していないため。
- ・プレゼン資料の作成がなかった。
- ・具体的な、わかりやすいプレゼン資料の作成方法はアドバイスされていないと思うから。
- ・プレゼン資料を作成する講義はなかった

10. 授業に関連する資料を調べる際の調査方法について具体的なアドバイスが得られていると感じますか？



はい 47名

- ・調べ方を教えてもらったから
- ・資料の調査方法についてのアドバイスはわかりやすかったから。
- ・古典的な かなの調べ方を、課題をやる前にしっかり教わったから。
- ・実際に資料がある場所などを見学できたから
- ・授業内でヒントなどを提示してくれるから。
- ・高知図書館というサイトを教えて頂いたからです。
- ・例としていくつか資料を提示してくれるので探しやすい

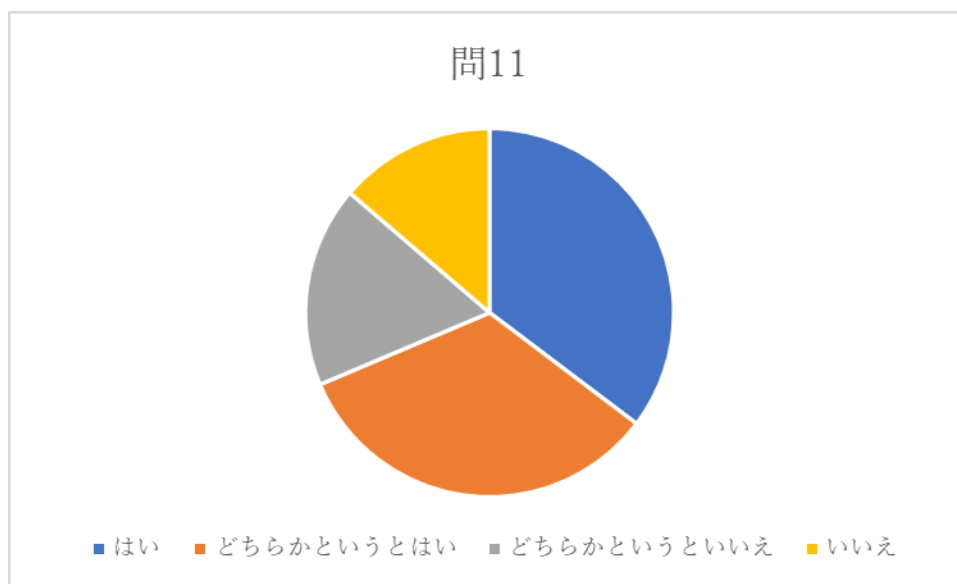
どちらかというとはい 45名

- ・参考文献が提示されるので、何を参考にしたら良いのかが分かりやすかったです。
- ・調査を少ししかできてないが、アドバイスを活かすことができていると思う。

どちらかというといいえ 8名

いいえ 2名

11. 提出した課題レポートに対して授業担当者からのコメントは十分に得られていると感じられますか？



はい 36名

どちらかというとい、はい 34名

どちらかというといいえ 18名

- ・コメントがあまり無かったからです。
- ・コメントは少ないが直接も少ない
- ・直接聞きに行っていないのが問題

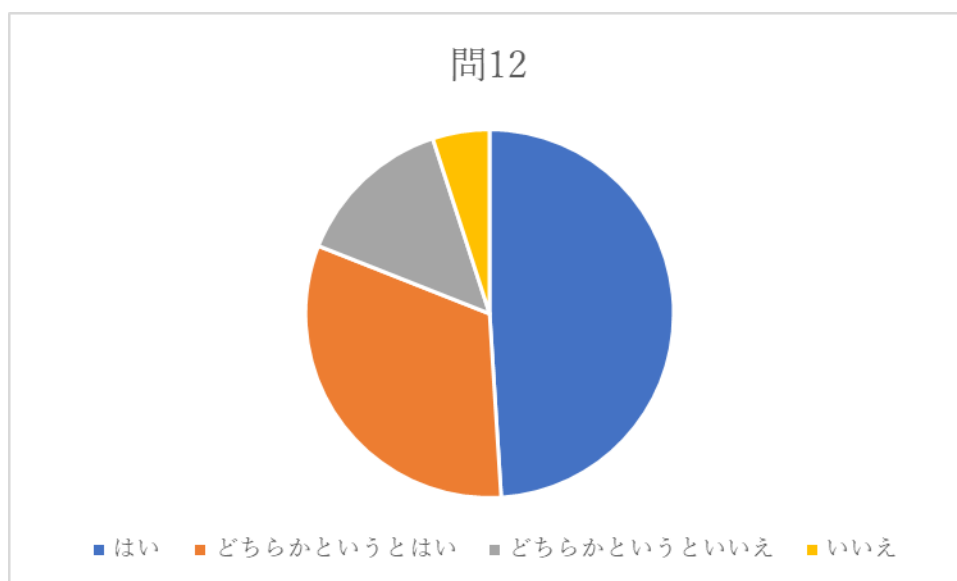
いいえ 14名

- ・コメントは全く得られなかった
- ・課題レポートに対するコメントはまだ得られていません。

なかった

- ・提出した資料についてのコメントをもらったことがないから。
- ・コメントはもらっていない

12. 他の授業とも比較して、この授業の準備には時間がかかると感じていますか？



はい 49名

- ・毎回予習を求められたから
- ・本を購入したり読んだりする作業が必要だから。
- ・他の授業で資料を作ることがほとんどないから。
- ・他の授業は課題があまり無いから。
- ・予習が欠かせないと感じた。
- ・プリントを見てわかることわからないことではなく、そのプリントを読み自らで調べた上でやはりわからなかったことを列挙していくため、授業の準備に他の授業より時間がかかったから
- ・グループ学習のため、相手の空き時間など考慮が必要なため

どちらかという、はい 32名

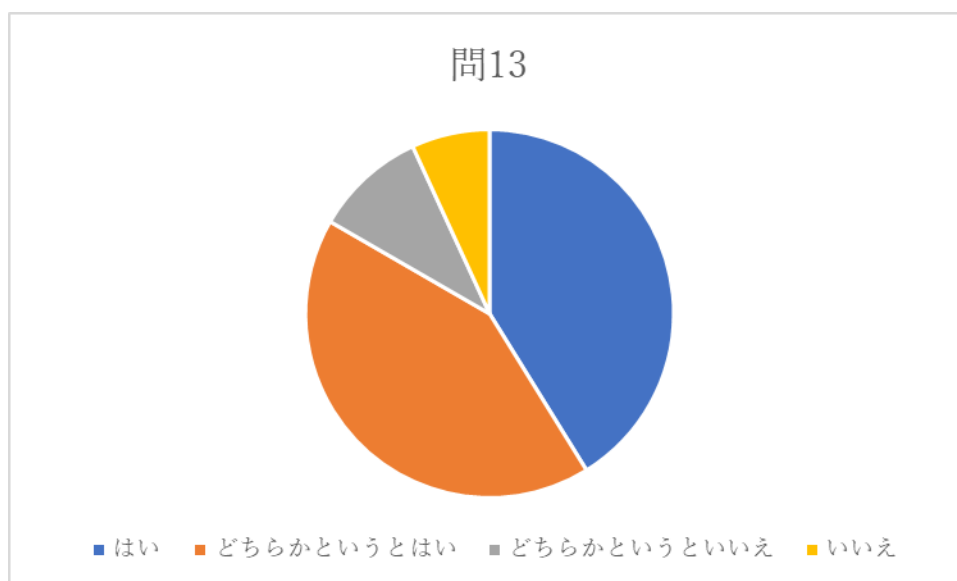
- ・予習しておく必要があったから
- ・資料探しなど事前に勉強する必要があったからです。
- ・ちょっとプリントや本などが溜まっていく

どちらかという、いいえ 14名

- ・他の授業と同じくらいだと思います。
- ・授業を振り返りながら準備すれば時間はかからないから。
- ・授業によるから。

いいえ 5名

13. この授業でのグループ学習で、他者との対話を通じて物事を多面的に捉えることが重要であると感じましたか？



はい 42名

- ・自分のなかだけの考え方のみでは解決できない課題が多かったから。
- ・自分一人では、考えられなかった意見を聞いたり、自分自身も意見を伝える事で整理できたり、更に意見が広がる事を感じたからです。
- ・自分では思いつかないことや話が聞ける
- ・自分と異なる意見を持つ学生がたくさんいて、その意見に納得したから。
- ・多面的に捉えることで思考が止まらないから。

どちらかという、はい 43名

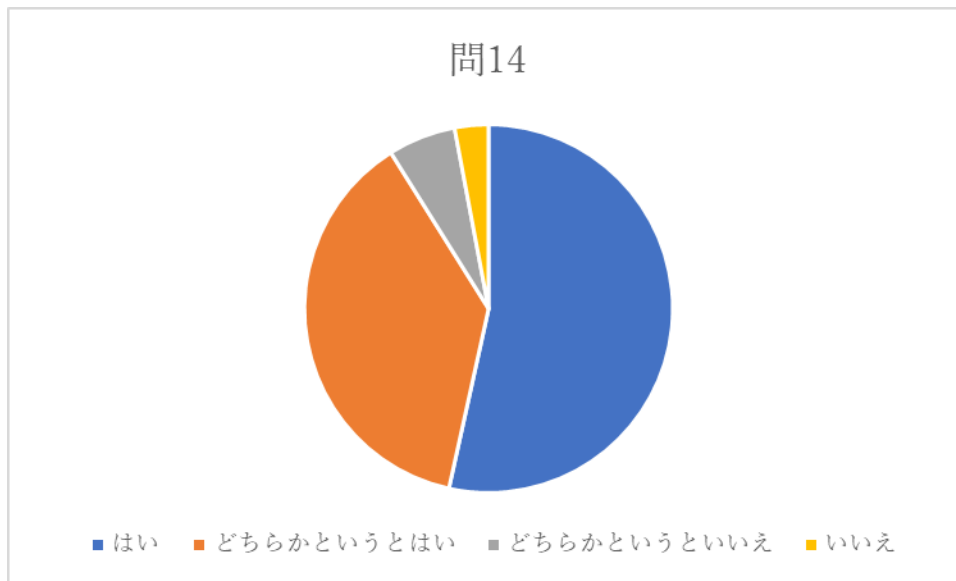
- ・自分にはなかった考え方、意見を知ることができたので、そう感じました。

どちらかという、いいえ 10名

いいえ 7名

- ・なかった
- ・グループ学習はしていない

14. 授業内容の時間配分は適切であるように感じますか？



はい 54名

- ・そうおもうから。
- ・多くのテーマを学びたいから。

どちらかというとい、はい 38名

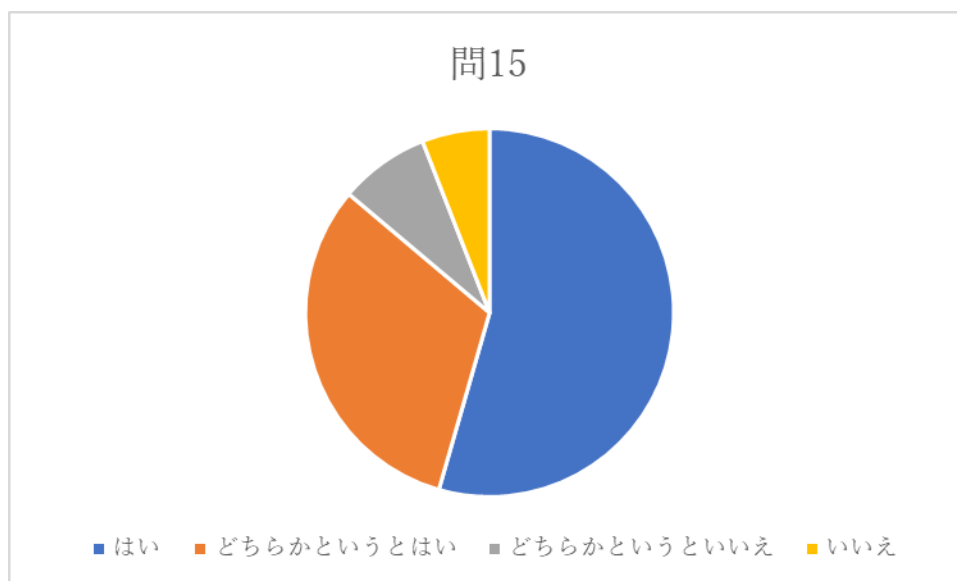
- ・話し合いの時間がもう少しあると良いと思います。
- ・グループ学習していると時間がかかるため、もう少し時間が多くてもいいと思う

どちらかというとい、いいえ 6名

いいえ 3名

- ・時間をオーバーすることが多々ある。チャイムも聞こえない

グループ学習での構成人数は適当であると感じますか？



はい 55名

- ・妥当だと
- ・少人数であったため、意見交換がしやすかったのではないかと思ったからです。
- ・ちょうどいいから。
- ・発言者の声がしっかり届く人数だと思うから。
- ・プレゼンするのに丁度いい人数だと思います。

どちらかというとはい 32名

- ・人数はちょうどよいですが、教室の机が動かせないで、グループで話し合いにくかったと感じました。

どちらかというといいえ 8名

- ・もう少し少なくともいいと感じます。

いいえ 6名

- ・グループ学習がなかった。

16. その他、この科目を受講して良かったと感じたことについて記入してください。(記入は任意です。最大 300 字まで)

・ 普段なら理解するのに時間がかかるであろう本の内容も分担して発表する形式のおかげで、スムーズに理解できたと思う。また、自分とは違う意見を話し合いの中で知ることが出来るのでその点良かったと感じています。

・ 自分の興味のある学問を、難しすぎない基礎的な内容から学べたのが良かったと思います。自分の学びたい学問に対する興味が高まりました。

・ 今後専攻したい分野が自分の興味関心に一致しているか確かめることができ、とてもためになりました。

・ 知識が増え、新しい学び方を見につけることができた。

・ 自分の判断でなく多面的な意見を捉えることができるから。

・ 二年生から本格的にプログラムごとに学んでいく中で、興味がある分野についてどのような研究がされているのか、学ぶ際にどのような視点で捉えていくのかなどを学べて、大変良かったです。

・ 大学生としての学習の基礎を築く事ができ、グループ学習により課題を多面的に見る重要性を身に付ける事ができた。経済社会はエビ等の商品を通じて見ることができるということに気づけた。

・ パワーポイントの作成の練習であったり、グループワークの練習につながって良いと思う。

・ これからの学びの中心になるゼミの内容や感覚がつかめたこと。

・ グループでプレゼンまで準備していく過程や、スライドの作り方を学ぶことができました。

・ 毎週、本の内容をまとめたレジュメなどを提出することにより、自分自身のレジュメ作成能力が上がったと感じたからです。また、ほかのゼミとの合同発表会では、人前で話すことがとても苦手だった私の良い経験となりました。

・ 思っていたよりもグループ活動が中心だったので、グループ内で仲良くなれ、意見を言い合える雰囲気で作業することができるようになったのが良かった。

〈まとめ〉

人文科学コースは、3つのコースがそれぞれ独自の方法で授業を行なっているので、一括りに考えることはできないのですが、概ね高い評価を受けているように思います。自由記述欄のコメントにも積極的に受講している様子が現れていると思います。

(教育学部)

全学の学問基礎論に関する授業評価アンケート実施は、学内ネットの moodle を利用し、2017 年 12 月中旬から 2018 年 2 月 6 日まで実施された。当初、2018 年 1 月 15 日までを締め切りとしていたが、学生回答率 (36%) が低かったため 2 月 6 日まで延長され、学生回答率 (44%) に伸びた。

それぞれのアンケート (全 16 問) には、①はい ②どちらかという、はい ③どちらかという、いいえ ④いいえ となっている。回答 (はい、いいえ) それぞれの回答者数と率 (%) を導くために、①と②は合わせて「はい」とし、③と④は合わせて「いいえ」とした。教育学部の全受講生 (144 名) の内、回答した学生数は 74 名である。

下記の表 1.) はその 1 問から 16 問までをまとめたものである。(但し、各問の理由は省略)

表 1.) アンケート「はい」「いいえ」の回答者数と率 (%) (四捨五入)

	1 問	2 問	3 問	4 問	5 問	6 問	7 問	8 問	9 問
はい	71 名 (96%)	68 名 (92%)	66 名 (89%)	64 名 (86%)	62 名 (84%)	70 名 (95%)	69 名 (93%)	60 名 (81%)	60 名 (81%)
いいえ	3 名 (4%)	6 名 (8%)	8 名 (11%)	10 名 (14%)	12 名 (16%)	4 名 (5%)	5 名 (7%)	14 名 (19%)	14 名 (19%)
	10 問	11 問	12 問	13 問	14 問	15 問	16 問		
はい	62 名 (84%)	47 名 (64%)	40 名 (54%)	72 名 (97%)	66 名 (89%)	69 名 (93%)	自由記 述		
いいえ	12 名 (16%)	27 名 (36%)	34 名 (46%)	2 名 (3%)	8 名 (11%)	5 名 (7%)	自由記 述		
(全平均値)	63 名 (85%)								
いいえ (全平均値)	11 名 (15%)								

表 1.) から「はい」の全平均値は 85%を示しており、学問基礎論の授業評価は高水準の成果を上げたと言える。但し、今後の授業実施方法の改善として、肯定的な要素を十分満たすよう継続し、且つ否定的な意見 (各問の理由) や問 16 自由記述を踏まえて授業を行う必要がある。

(理工学部)

授業科目「学問基礎論」への理工学部からの受講者数は全 93 名であった。受講者の学年別の割合は、2 年次が 2 名、残りの 91 名が初年次であった。実施したアンケートの設問は、選択形式の設問が 15 問、それらに対する自由記述欄が 15 箇所、授業全体に関する自由記述欄 1 箇所の全 31 問から構成されている。

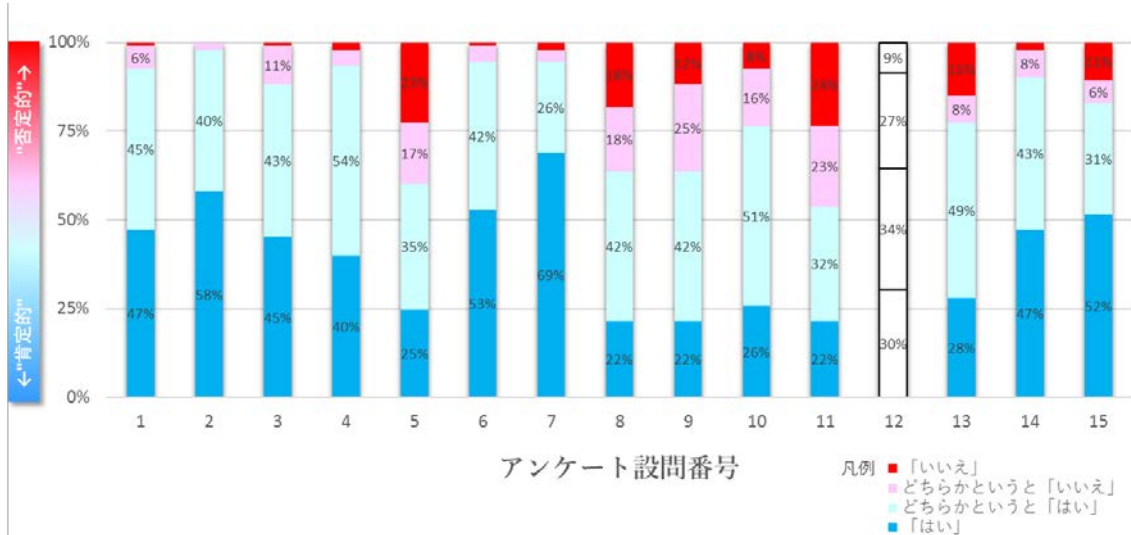


図 1 選択式の各設問に対する回答の分布(理工学部)

図 1 に、選択形式 15 問の各設問に対する回答分布を示す。無効回答はなく全て有効回答であった。選択形式の設問に対する回答は次の 4 つ {「はい」、「どちらかというとはい」、「どちらかというといいえ」、「いいえ」} から選ばれる。設問番号 12*を除いて、「はい」または「どちらかというとはい」ならば授業内容に対して肯定的な回答であり、反対に「いいえ」または「どちらかといえはいえ」ならば否定的な回答内容と判断される。図 1 の回答分布から、いずれの選択設問に対する回答も、当該授業に対する肯定的な回答が過半数を占めていることから、受講生にとって有意義なカリキュラムであったことが伺える。

したがって自由記述欄への回答も概ね肯定的なもので占められていたため、特に否定的な回答を次に抜粋した(ほぼ同内容と思われる複数の回答は割愛した。)

【否定的な回答】

- 設問 3, 理解が進むような講義形式になっていますか?に対する記述欄
「グラフやデータを扱った専門的な話が多く、素人には理解が難しい時がある。」
- 設問 5, グループ学習による効果は、この授業で感じられますか?に対する記述欄
「正直そこまで意見出してくる人があまりいないので、何とも。」
「全くない。別に必要性を感じない。」「グループ学習をしていない。」
「授業外で集まるのでなかなか予定が合わず、一部の人間だけでプレゼン準備をした。」
「グループ学習の時間はほとんどなく、先生方の講義が中心である。」
- 設問 8. グループ学習の際に、積極的に発言しようと思いが湧きますか?の記述欄
「誰も発言してなかったら、発言しないといけないと思うけど、人任せになりがち」
「グループ学習はほとんどなく、講義がほとんどであるため、発言時間は全くと言っていいほどなかった点があげられる。」

自由記述欄への回答は、肯定的な内容が大多数だったものの、以上のようなグループ学習に関する不満が比較的多く目に付いた。グループ学習を通じて全ての受講生が公平に発言する機会を設けることは限られた時間では難しいだろうと推測されるが、改善点をあえて挙げるとすればグループ学習の効果的な進め方だろうことが今回のアンケート結果からは伺えた。

※設問番号 12 の内容は、「他の授業とも比較して、この授業の準備には時間がかかると感じていますか？」である。

(農林海洋科学部)

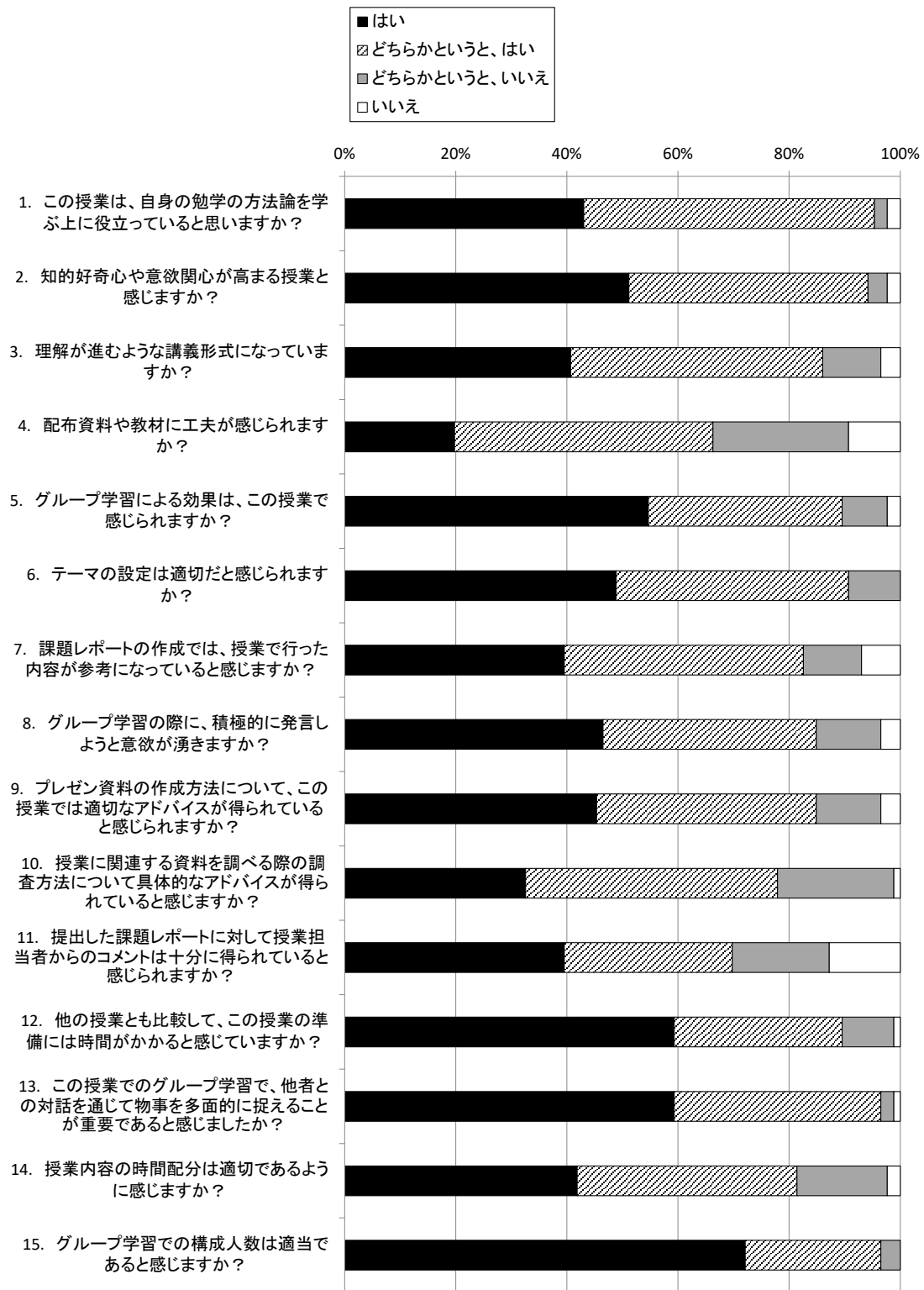
農林海洋科学部では分野毎の独自性を学科・コースごとに開講して課題設定や学問的関心を高める試みを行っている。アンケート回答数は農林資源環境科学科では 20 名、農芸化学科では 40 名、海洋資源科学科では 26 名の計 86 名であり、資料 1 のとおり、ほとんどのアンケート項目で「はい」「どちらかという、はい」と返答した学生が 8 割以上を占めている。したがって、現在のグループワーク・プレゼン発表・レポート課題を主体とした講義進行が受講生に受け入れられていると考えられる。

この科目を受講して良かった点として、「OB らの講義により高知県の産業の意外な面が知ることができて嬉しい」、「職種や世代、立場の異なる人々の話が聞ける機会は貴重」などの回答があった。グループワークに関して、「様々な地域からのメンバーと討論するのが面白い」などの意見があった。また、「グループワークを通じて様々な視点で物事を考えられるようになった」、「技術を磨く良い機会になった」、「役割分担して発表内容をしっかり理解することの重要性がわかった」等の回答があった。また、その他の点として、「わかりやすい論文の構成を学べた」、「論文の読み方や要約の方法が学べた」、「卒業論文の準備に役立つ」という回答があった。振り返り学習について、「プレゼン資料やレポートについて教員から意見をもらえると嬉しい」との回答もあり、本講義は教員と学生の距離を縮める効果があることも伺えた。

以上のような好意的な回答がある一方で、高評価が 80% を切った項目についていくつか改善点が寄せられた。課題レポートについて、「プレゼンテーション作成の技術が身につくとしていたが実際には役立っていない」、「資料の調査方法の説明が不足している」等の回答があった。また、「本格的な専門知識のない中で学術的なグループワークをする意義が不明瞭」との意見もあった。回答の中には「該当なし」とするのが妥当と思われる点も含まれていたが、いずれにせよ、以上の意見を踏まえた上で講義内容を改善していくことが必要であろう。

学科・コースごとにカリキュラムが異なるため、評価基準がばらつくことが予想されるため、今後は公正な成績評価の実施に向けて、カリキュラムの到達目標を各分野で検討するとともに、高等学習の基礎を学ぶ初年次学生への配慮を担当教員が持つことが重要であると思われた。

資料 1. アンケート集計結果。農林海洋科学部（H30 年度）



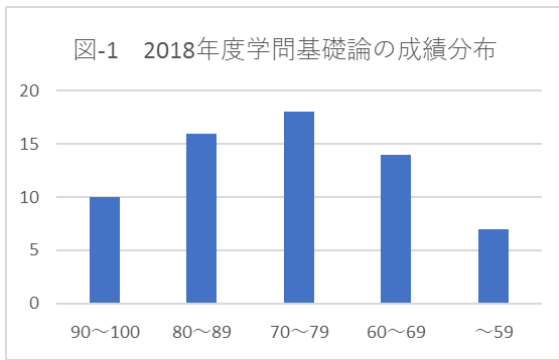
(地域協働学部)

地域協働学部の 2018 年度学問基礎論は、次の 3 点を教育目標として実施された。①社会問題を分析し、実践的な課題や行動指針を引き出すための社会科学的素養を育成すること、②構造的に問題を把握するための技法を習得させること、③グループワークを取り入れた授業方法をとることにより、ファシリテーションを始めとした議論の進め方やプレゼンテーションのトレーニングを行うこと、以上である。

授業の方法は、世界の貧困問題を扱った新書をテキストとし、毎回 1 章分ずつ、5～6 名のグループで内容に基づく討論を行わせる方法を取った（ただし、最後の 4 回は後述の内容）。このグループワークに際しては、事前にテキストの担当箇所の内容や、関連して各自が付け加えたり分析した結果をポンチ絵 1 枚にして準備させ、そのポンチ絵を使って、グループ内で発表し合うようにした。グループ内で発表が一巡した後は、ホワイトボードにファシリテーショングラフィックの位置づけで、議論の経過を書かせ、それを基に、グループが特に掘り下げた点について、授業時間の最後に他のグループに対してプレゼンテーションを行うという流れで進めた（また、授業の最後に、その日のグループワークの内容、状況等について、担当教員が 10 分以内で講評を行った）。

受講生中 26 名が授業評価アンケートに回答を寄せたが、目標①については、アンケート「1. この授業は、自身の勉学の方法論を学ぶ上に役立っていると思いますか？」～「7. 課題レポートの作成では、授業で行った内容が参考になっていると感じますか？」の回答のほぼすべてが、「はい」または「どちらかといえばはい」となっており、興味を持って学習を進められたことがわかる。また、上記 1～4 の自由記述等によれば、テキストの内容等を含め、新たな知識や気づきを得たとの感想も散見されることから、社会科学的素養の育成に関して、相応の効果はあったものと考えられる。アンケート回答数が受講生の約 40%であるので、未回答者がこれと異なる感想を持っている可能性はあるが、成績評価の際のポンチ絵や授業開始前の貧困に対する認識と授業終了後の認識の違いを書かせた最終レポートの内容によれば、目標①に関する達成度はかなり高いものと考えられる。ただし、社会科学的素養と言っても、理論的ベースを持たない状況のため、やや深さには欠ける理解度とは考えている。目標③についても目標①と同様に、アンケートの回答によれば、概して高い評価となっている。ただし、プレゼン資料の作成方法に対する助言や、レポート・ポンチ絵に対するフィードバックは、時間的な余裕が無く、あまりできていなかったため、それが如実に反映された低い評価となっている。この点は、次年度以降に改善すべき課題と認識している。目標②については、担当教員は、ポンチ絵を使って発表し合うことで、より良い表現方法を学びあい、構造把握に優れたとらえ方をまねるような行動が発生することを期待した。しかしながら、上述のように、担当教員が細かにポンチ絵に対する講評や助言を行えなかったため（1 度、ポンチ絵の見本を見せて、いくつかのパターンの解説を行ったが）、自然発生的にレベルが向上したと考えられる学生は、やや少なかったと考えられ、上記のように改善の必要な課題が残されたと考えている。

なお、成績分布は図のようになっている。不可の履修者のほとんどは出席不良もしくは課題提出率の低さに基づくものである。良と可の成績評価となっている学生の理解度の向上を図るための要点が、上記の構造的把握のための支援強化にあると考えられる。



(土佐さきがけプログラム)

2018年度の土佐さきがけプログラムにおける授業評価アンケートでは、7名の回答が寄せられた。16個の質問のうち、そのほとんどは「はい」あるいは「どちらかというと、はい」という回答であり、学問基礎論の授業内容に対して好意的であり、比較的積極的に授業に参加できたことが受け取れる。

ただし、質問5「グループ学習による効果は、この授業で感じられますか？」に対しては「どちらかというと、いいえ」あるいは「いいえ」の回答が3名おり、その理由として「そもそもグループ学習がなかった」との回答があった。学問基礎論の中では、座学に終始しているところもあったようだが、その他の可能性として、グループでディスカッションする時間を設けているにもかかわらず、教員から強制的に指示されなかったため、グループ内でのコミュニケーションを持たず進められた可能性もある。

他にも、質問12「他の授業とも比較して、この授業の準備には時間がかかると感じていますか？」に対し3名の「いいえ」の回答があった。これについて、「はい」と回答した学生に「先生と課題による」、「いいえ」と回答した学生に「たまにしか準備の必要がない」とあったことから、質問自体が「この授業の準備に時間がかかる」ことが、学生自身にとって良いことなのか、悪いことなのか、判断が割れたように感じられる。

質問1、2、3、6、7、9、10については、全員から「はい」あるいは「どちらかというと、はい」という回答であった。これらの質問は、講義内容とプレゼン作成に関連するものであった。したがって、グループ学習の進め方をどのように行うかが今後の課題といえる。

(医学部)

1) 医学部の学問基礎論の実施内容の要約

医学科では、2016年度から医学の基礎的な学問としても位置づけられている行動科学に焦点を当てたコースを実践している。これは、2023年に予定されている医学教育分野別評価の評価基準に合わせたものになっている。また、1年生のモチベーションを維持するために、心理学、解剖学、生理学、公衆衛生学、精神医学の領域を中心に、専門教育の入門、基礎編となる授業を展開した。今年度は、各授業のスライド提供、小テストをmoodle上で実施し、自己学習を促進させる仕組みを整えた。

看護学科では、看護を学ぶ初学者として今までの生活(自分自身や家族、地域)を振り返り、

健康的な生活とはどういうことなのかを考え、ディスカッションを通して人間の健康と環境に繋げていくことを目標に授業実践を行った。さらに臨床早期実習を行い、学生それぞれの体験を学生間で共有し新しい発見をしながら看護学に対する興味や関心を深める内容となっている。

2)学生からのフィードバック

学生のアンケート結果（表）から、授業内容に関して、知的好奇心や意欲関心が高まるような内容になっており、学生のニーズに合っていたと思われる。また、テーマに関しては、

- 個別には、医学の入り口となる内容を教わることができるから。
- 自分の学習法を見直す有意義な機会だから。
- 医学の内容で、難しすぎず、噛み砕いてわかりやすい講義なので勉強意欲が湧くから。
- 医学部らしい内容だから。
- 好奇心が高まる講義をしてくださるから。

といった、個別のコメントが見られた。また、講義の進行や形式に関しては、

- 講師が生徒の理解を度々確認するようにしており、その時の理解度の程度に合わせて授業のペースを調節しているから。
- レジユメがわかりやすいから
- フォントや字の大きさ、図の配置に気を配っておられると思う
- 図を入れて理解しやすくしている。
- スライドも文字ばかりでない見やすいものであったから。

といった、個別のコメントが見られた。

（表）アンケート結果から

	自身の勉学の方法論を学ぶ上で役立っている	知的好奇心や意欲関心が他科ある授業と感じる	理解が進むような講義形式になっている	配付資料や教材に工夫が感じられる	テーマの設定は適切だと感じる
はい	78.8%	78.8%	83.8%	80.8%	86.9%
どちらかという、はい	14.1%	20.2%	15.2%	17.2%	11.1%
どちらかという、いいえ	6.1%	1.0%	1.0%	1.0%	2.0%
いいえ	1.0%	0.0%	0.0%	1.0%	0.0%

3)今後に関して

概ね、医学部の学問基礎論は良好に運営されていると考えるが、今後さらに、授業内容のテーマの見直し、医学の進歩に合わせた授業内容の改善を継続的に行っていく。

3. FD

学部によって、学問基礎論の実施形態が異なる。このため、学部ごとにその特性に合わせたFD活動を実施した。昨年度に引き続き、学問基礎論の一部において、アカデミック・ライティングの講義を導入して、学問基礎論で学生自身が学んだ内容を正しく、かつ正確に他者に伝える力を養成したが、その様子を学問基礎論担当者が見学する、あるいは、そこでの指導内容の概要資料の通読を通じて授業担当者の Faculty Development に務めた。

4. その他 本年度は特になし。

以上

4. 人文分野分科会

カリキュラム編成に関する報告

人文分野分科会長 大櫛敦弘（人文社会科学部）

1. 平成30年度の次年度カリキュラム編成の経過

(1) 平成30年10月18日の第4回カリキュラム等編成部会において平成31年度の共通教育に係る担当体制（案）が提示されたのをうけて、10月21日に分科会を開催しカリキュラム編成にとりかかることになった。その間、教育学部裡の担当コマ数の調整という不確定要素もあったが、おおむね順調に編成作業は進行した。

(2) 12月11日に平成31年度人文分野開講授業題目表をとりまとめて作成し提出、平成31年1月17日の第3回カリキュラム等編成部会、2月5日の第6回共通教育実施委員会においてそれぞれ承認された。なお、とりまとめに当たっては、今回も分科会委員、共通教育係の各位に多大な協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

2. 平成32年度カリキュラム編成に向けた課題

(1) 担当体制の問題

昨年度報告で対応を強く求めていた物部キャンパス開講体制の見直しについて、「社会分野との間で2科目と3科目とを交替・隔年で開講する」との従来の体制が、31年度から「毎年2科目」へと変更された。とりまとめの現場の状況に理解を示していただいた関係各位には深く感謝する次第である。また担当教員の減少という実状に合わせた担当体制の見直しも進められている。とはいえ、全体の母数が減っている中でのことであるので、個々の教員の負担は決して軽減されているわけではない。また受講学生数が変わらない中での担当コマ数の減少は、一面では授業当たりの受講生数の増加にもつながることとなり、その点での担当教員の負担のみならず、2学期からの2号棟の改修も控えて教室のキャパシティの問題なども懸念される場所である。以上は本分科会に限定される問題ではないが、やはり「履修機会や授業の質の保証」を確保する意味でも、担当教員減少への歯止めや施設の整備など、共通教育の立場からも積極的に声を上げていただきたい。なお、物部キャンパス出講の分野間ローテーションについては、この一年間分科会で検討して結論を出すこととなっている。

(2) 成績評価ガイドライン（案）に対する共通教育の対応について

この問題も本来、まずもって全学的、あるいは共通教育全体で対応すべきものではあるが、本分科会に関連する範囲に限っても、オムニバスや芸術系の授業など、かならずしも一律に適用しがたい授業も存在することから、どのように取り組んでゆくか、引き続き考えてゆくこととしたい。

(3) 非常勤講師への対応

30年度はこれまで長年にわたって非常勤を担当されてきた先生が退かれる意向を示されたため、代替の先生にお願いすべく新規採用人事が行われた。関係各位のご尽力によって、幸いにも適任の方の採用となったが、その過程で、それぞれの非常勤講師への窓口役が不明となっている事例の存在することが判明した。長期にわたる間に転任や退職のあったことが原因であるが、これについては今後きちんと引継を行って、万全の対応ができる体制をとるようにしてゆくこととしたい。

平成 29 年度共通教育第 2 学期成績評価分布の解析結果について期間内に開講された授業の分析を試みた。その結果、該当科目 20 のうち、優以上の評価が受講生 50%以上であった授業は 5 科目（25.0%）であった。しかしながら、担当教員に確認したところ、5 科目中 4 科目は分析対象外の目安となる教育活動に当てはまっていた。すなわち、人文分野分科会にて優以上の評価が受講生 50%以上であった授業は実質 1 科目（5%）のみである。当該科目（科目 A）の担当教員は「学生のモチベーションは高く、それなりに多くの学生がついて来てくれたこと」「1 学期の関連する授業で興味を持ちさらに勉強したいと思って来た学生が多かったこと」の 2 点を優以上が 50%となった主な理由としてあげている。また履修人数が多いにもかかわらず「繰り返しの確認、前回の講義のまとめを必ず行っている」とのことである。つまり、今回優以上の評価が受講生 50%以上であったのは、「授業に興味を持ちさらに勉強したいという高いモチベーションを有した多くの学生」に、担当教員がそのモチベーションに応えるよう熱意をもって授業を展開した結果であり、高い教育の質が担保されているといえよう。高いモチベーションを有する優秀な学生が多く受講する授業において教員が適切な授業を展開すれば、到達基準をはるかに上回る学生が続出し「優以上の評価が受講生の 50%以上」となるであろう。これは、公正な成績評価であり、むしろ、求められている基準である「優以上の評価を半分以下」としてしまうことは不正（評価が厳しすぎる）となる。

Table 1 優以上の評価が受講生の 50%以上であった 5 科目

科目名	単位	受講者数	秀(%)	優(%)	優以上(%)	良(%)	可(%)	不可(%)
科目 A	2	175	15.4	49.7	65.1%	14.3	4.0	16.57
科目 B	2	67	46.3	23.9	70.1%	13.4	10.5	5.97
科目 C	2	35	20.0	42.9	62.9%	28.6	2.9	5.71
科目 D	2	17	0.0	52.9	52.9%	23.5	17.7	5.88
科目 E	2	16	68.8	18.8	87.5%	0.0	0.0	12.5

また、分析対象外となった科目においても担当教員の分析より、受講人数に関わらず、かなり熱意をもって授業を行っていることは明らかである。さきほどと同様、今回の結果は教員の授業努力により達成された高い教育の質の証明といえよう。教員の努力により質の高い教育が行われ、その結果、授業に対して高いモチベーションを持つ学生が優秀な成績を修めることの中に問題があるだろうか。公正な成績評価の実施において、優以上の評価が受講生の 50%以上」に固執し今回のようなケースも含めてしまえば、到達基準をはるかに上回る優秀な学生に対して、不正に厳しい評価をせざるを得なくなる。実際、上記 5 科目の担当教員に「優以上の成績を修める学生の比率が半分以下となる」よう考えていること、実践していることを確認したところ、授業内容や期末試験の難易度をより高めるという回答が多かった。事前に到達基準を示しているにもかかわらず、実際に学生に求めるものがより高度であればそれは公正とは

いけないのではないだろうか。そして高度なことを求めた結果学生が授業についてこれないのでは本末転倒である。

分析対象ではない昨年度2学期の授業評価を分析したが、授業内容も受講生の質も均一ではないものに概な（優以上の成績を修める学生の比率が50%）基準を示してもあまり公正ではないと感じる。なお、今回、該当授業の担当教員に自己分析をお願いしたところ下記のよう意見があったことを最後に付け加えておく。

- ・論議はもうできないのでしょうか、今回なされた要請の意味に関する教育理念的な論議が一切なかったことを残念に思います。

- ・この事態を学生は一切知らされていないというのはいかがなものでしょうか。

- ・基準を達成するために、これまでの採点基準でまず採点し、機械的に目標値になるように操作することも考えています。やっていることの意味がよくわかりませんが。

- ・論述型試験をやめて、高校のような問題にするべきでしょうか。大学教育にふさわしいとは思いませんが。

- ・達成度にかかわらず非情な設問・採点基準になっても申し合わせに従わざるをえないでしょう。（結果を見ないと程度がわかりませんので）

FD 活動報告

人文分野副分科会長 中村るい(教育学部)

平成30年度共通教育人文分野分科会のFD活動としては、2018年11月から、2019年2月まで、他大学でのFDの取り組みについて聞き取り調査を行った。前年度のFD活動報告で、「オーディオ機器をもちいた自立的授業改善の試み」の実施が報告されているが、活動内容のマンネリ化が指摘されており、他大学の活動例を調査した次第である。

聞き取りを行った大学には、跡見学園女子大学文学部、愛媛大学人文学部、茨城大学教育学部、新潟大学教育学部等が含まれる。各大学の様々な取り組みが明らかとなり、FD活動の課題が浮かび上がった。とくに、「GPA(Grade Point Average)の信用度を上げるため、成績基準の平準化が必要である」という成績評価の問題は、複数の大学で認識されており、本学でも重要な問題と考えられ、今年度、FD研修会を実施し検討することとした。

「成績評価」について、(1)基本情報の確認として、「公正な成績評価の実施に向けて(申し合わせ)」(平成30年3月19日付 学士課程運営委員会)を概観した。次に(2)成績評価の現状を共有するため、(A)2017年度後期、(B)2018年度前期の、人文分野分科会の授業の成績評価一覧表を分析した。

この結果を用いて、2019年2月22日16時30分～17時50分にかけて、FD研修(成績評価の基本情報の確認、現状の分析と意見交換)会を実施した。(A)「2017年度後期」の成績評価は、上記の「申し合わせ」(平成30年3月19日付)以前の評価であり、(B)「2018年度前期」に、「優および秀」の評価をつける教員が減少したことは、「申し合わせ」に配慮した成績評価といえるだろう。意見交換から、本学における教育の質保証の問題、および社会からの信頼性の確保について、教員のさまざまな工夫や経験を共有できたことは、次年度に向けて有効な意見交換となった。本研修会の参加者は5名であった。

5. 社会分野分科会

平成 30 年度 社会分野分科会・カリキュラム編成に関する報告

社会分野分科会長 西島文香（人文社会科学部）

◆カリキュラム編成

1. カリキュラム編成の経過（平成 30 年 10 月～平成 31 年 2 月）

基本開講数 53 コマについて、人文 27、教育 4、地域協働 22 と決定した。社会分野を担当する人文社会科学部（社会科学コース、国際社会コース）、教育学部、地域協働学部は次年度担当体制について依頼をし、担当者・時間割を調整し決定した。また、別途センター所属教員に次年度担当体制について依頼を行い、時間割を調整し決定した。

平成 31 年度のカリキュラムにおいては、社会分野が担うべき基本開講数 53 コマの他に、各学部等の協力を得て多様な科目を開講するカリキュラムを編成できた。

上記の基本開講数に加えて、教養科目においては 15 科目の題目を人文学部、地域協働学部、地域連携センター、総合教育センター、国際連携センター、評価機構、安心・安全機構、全学教育機構等の協力を得て編成することができた。

平成 31 年度は社会分野で計 68 科目が開講され、うち 6 科目は新規開講である。

平成 28 年度から共通専門基礎科目という科目区分が廃止されることになったが、27 年度以前入学の学生が平成 31 年度も十分科目履修できるよう、6 題目程度を人文社会科学部の協力を得て編成することができた。

2. 平成 31 年度カリキュラム編成のポイント

(1) 物部キャンパス開講科目については、27 年度の農学部教務委員会との協議を経て、人文分野と社会分野を合わせて毎年 5 題目開講することとなった。さらに、人文分野分科会との協議の結果、社会分野については、28 年度に 3 題目、29 年度に 2 題目、30 年度に 3 題目を開講することになっていた。したがって、30 年度の物部開講数は人文社会科学部 2 題目、地域協働学部 1 題目とした。平成 31 年度以降、物部開講科目は 2 題目となり、平成 31 年度は人文社会科学部 1 題目、地域協働学部が 1 題目開講することとなった。

3. 課題

(1) 28 年度から共通専門基礎科目については廃止されたが、読み替えによって学部専門科目に以降された科目も学部の基本開講数(ノルマ)としてカウントした。しかし、いずれ共通専門基礎科目として履修する学生はいなくなるので、今後のカリキュラム編成に際しては他分野との均衡なども考慮しながら、推移を見守る必要がある。

(2) 教養科目の基本開講外の開講科目が 15 題目あることは、多様な科目を提供するという観点からは歓迎すべきかもしれないが、センター関係の教員の増えていることなどから、各学部のノルマの見直しに結び付けるなどの対応も必要かもしれない。

- (3) 全学的改組が進行する中、各学部、センター等に配置される教員が増えてきており、共通教育委員会として新規授業の開講をお願いしているところである。教養社会分野を担当できる教員数に合わせて、ノルマ等のあり方について検討すべきである。
- (4) 共通の名称の科目（「経済を考える」等）について、それぞれの科目が特色のある内容となっているため、副題を付けるなどして、その内容が学生に分かりやすくすることを検討してもよいだろう。

◆ 自己点検・評価活動

1. 平成 30 年度 自己点検・評価活動の実施状況

平成 30 年度は、共通教育社会分野における自己点検・評価活動として、主に第 2 学期において「授業評価アンケート（第 5 週目、第 15 週目）」を設定しており、第 2 学期を中心として、第 1 学期に 2 科目、第 2 学期に 7 科目の実施となった。

2. 平成 29 年度 自己点検・評価活動の結果

【第 5 週目・第 15 週目アンケート結果】

(1) 問 1～問 5 教員の授業への向き合い方の評価

“問 1. この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか”に関しては、9 割程度の学生が高評価である。そのような中で、第 5 週目と第 15 週目との比較において、「はい」「どちらかといえばはい」などの高評価の割合が+3%と向上している。

“問 2. この授業で教員は、受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行っていると思いますか”に関しても、8 割～9 割近くの学生が高評価を示している。加えて、第 5 週目と第 15 週目との比較においても、「はい」の割合が+3%向上している。

“問 3. この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか”に関しても、9 割を超える学生が高評価を示しており、第 5 週目と第 15 週目との比較において、「はい」「どちらかといえばはい」などの高評価の割合が+4%と更に向上している。

“問 4. この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか”に関しては、8 割近くの学生が高評価を示している。第 5 週目と第 15 週目との比較においては、「はい」の割合が 3%上昇している。

“問 5. この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか”に関しては、8～9 割の学生が高評価を示し、第 5 週目と第 15 週目との比較において、「はい」割合が+10%と大きく向上している。

以上の結果から、8～9割の学生が教員の取り組みを高く評価しているようである。この結果は、例年（6～7割）よりも高い評価である。

(2) 問6 授業への満足度

“問6. この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか”に関しては、9割以上の学生が高評価を示しており、加えて第5週目と第15週目との比較においては、「はい」の割合が+5%と大きく向上している。

取組の評価と共に、今年度の学生満足度は1～2割程度高くなっている。

(3) アンケートに対する授業改善効果と回答負担感

“アンケートによる授業改善効果”に関しては、効果があるとする「はい」「どちらかといえばはい」の回答が回答者の72%と高評価であった。また、“学生の回答負担感”に関しては、負担を感じる「はい」「どちらかといえばはい」の回答が31%であった。回答者の3人に1人は負担を感じており、そもそもアンケートに参加しなかった260～261人（受講者の38%）の存在を考えると、その負担感は少なくないものと思われる。

3. 今後に向けて

今後の課題として、授業評価アンケートの活用レベルの向上がまず挙げられる。今年度も昨年度に比べて件数が増加したが、ここ数年の実施教員・実施科目はほぼ同じメンバーであり、広がりを感じられない。学生の授業評価からも、そもそもの授業レベルの高い教員がこの授業評価アンケートを活用していることがわかる。昨年に引き続き、取り組み未実施の教員の実施モチベーションが上がるような取り組みで、全体の授業改善の意欲向上につなげていくことが第一課題である。

昨年度は、第二課題として実施したアンケート回答者数が科目登録者数と比べて40%前後しかないことを問題として取り上げたが、今年度は60%の回答率まで引き上げられていた。しかしながら、細かく見ると改善可能性はある。

アンケートの回収率について、「web入力」と「紙媒体」とで比較すると、web入力では回答率は53%、紙媒体では76%となっている。現在は、紙媒体からweb入力への移行期であるが、うまく移行できていない状況が見える。アンケート結果の即時活用を考えると、web入力への移行とともに、回答率の維持向上の工夫が求められる。

また、回答を引き上げれば、アンケート結果の満足度が下がるが多いが、結果はその反対でいずれも昨年度よりも高い評価であった。この点を踏まえても、アンケート実施教員のレベルの高さが感じられる結果であった。

◆FD活動

課題探求実践セミナー分科会と合同で下記、FD企画を実施した。

1. FD企画の概要

テーマ：FD企画 地域におけるワークショップ実践例の共有

日時：2019年3月8日(金) 13時～14時

場所：総合研究棟2階 会議室2

2. FD企画の内容

「地域におけるワークショップ実践例の共有」をテーマとし、正課・正課外でのワークショップ実践例を振り返りながら、課題点を議論した。

① 地域実習・演習（正課）におけるワークショップ実践例

地域実習・演習（正課）によるワークショップを例示しながら、各種ワークショップの手法について議論が行われた。また、ファシリテータが学生の場合、教員は学生の評価業務に関わる制約から、ワークショップ全体への関与が限定的になること等が議論された。

② 地域（正課外）におけるワークショップ実践例

正課外のワークショップを例示しながら、各種ワークショップの手法について議論が行われた。正課と異なり、教員のワークショップ全体への関与の自由度が高いことが挙げられた。一方、短期的な関わり方が多く、長期的に地域に関わることの困難性が指摘された。

③ アイスブレイク実践例

各種アイスブレイクの事例について議論が行われた。アイスブレイクは、「チーム形成を行う」、「場をなごませる」などの効果がある反面、ワークショップのテーマが深刻な場合、アイスブレイクを楽しく行うこと自体が批判の対象となることが指摘された。

④ フリーディスカッション

フリーディスカッションでは、ワークショップにおける情報公開の注意点について議論が行われた。特に、分野によっては、個人のプライバシーや人権に関わる議論が行われることがあり、「ワークショップ＝公開」と考えるには、課題が多いことが指摘された。また、ワークショップの開始や参加の前提条件として、これらについて、参加者に秘匿・公開の合意を得ることの重要性が議論された。さらに、商品・サービスに関わるアイデアを検討するワークショップにおいては、ワークショップから得られた知見の秘匿性について検討すべきであることが議論された。

3. 今後に向けて

今回のFD企画では、来年度に向け、FD企画の検討を行うことと位置づけ、試行的にワークショップを実施した。課題としては、①社会分野は授業内容が多義に渡るため、拡散型のFDより、特定のテーマに絞ったFDの方が充実する。②ワークショップ、授業進行などの技法については、各分野で行われている技法を共有するFDは有意義だと思われる。③FDで得られた知見は何らかの形で共有・公開することを検討すべきである。などが挙げられる。

6. 生命・医療分科会

平成30年度共通教育実施機構会議活動報告書(カリキュラム編成)

生命・医療分科会会長
野田 智洋 (医学部)

1. 平成30年度カリキュラム編成の経過

各学部担当教員とメールによる連絡調整を行い、カリキュラム編成の基本方針を確認した上で、下記の通り編成作業を行った。

- ・ 1月29日(月)：例年どおり、学部、センター代表者あてに責任者の選任と、開設学期ならびに曜日時限の決定通知を行い、平成30年度授業計画策定の依頼を行った。
- ・ 2月9日(金)：すべての部局から授業計画が提出された。保健管理センターの担当が井上顕先生に変更となった。
- ・ 2月9日(金)：代表者に授業計画一覧表を送り、シラバス登録を依頼した。
- ・ 4月12日(木)：授業を開始した。

開講曜日及び時間の決定に当たっては、時間割の移動を極力おさえ、混乱のないよう配慮した。従って、これまでの木曜日開講をベースとした時間割とした。さらにオムニバス形式にするか部局等が独自で開講するかについて検討したが、偏ることなく広い視野に立って授業を提供するという観点から、部局等のオムニバス形式とすることとした。

2. 平成30年度カリキュラムの変更・改善点

「健康」Aの代表者は引き続き教育学部の矢野先生が、Cの代表者は同じく駒井先生が担当することになった。Dの代表者は保健管理センターに着任された井上顕先生が担当して下さることになった。「アルコール学概論」に加えて、昨年度から岩崎泰正先生による「一般学生のための医療と医学の知識」が引き続き開講されたため、この分野の選択肢が増えている。学生による授業評価アンケートでも好評のようである。担当の先生方に感謝したい。

3. 平成31年度への課題

「健康」は、A～Dの4科目をすべて1学期に開講しているが、今年度の受講者総数は589名となり、大規模クラスの解消には好都合であった。一科目あたりの受講者数は平均147.25名(最大177名～最小125名)となっているが、100名前後の受講生で収まることが望ましいと考える。授業内容については、担当部局の学問特性を生かしつつ、内容が偏ることなく編成したい。

教育学部の保健体育コースは駒井先生の定年退職に伴い、4名体制で健康とスポーツ科学講義を維持することとなった。授業担当コマ数の負担軽減が望まれる。

1. 平成 30 年度「健康」

自己点検評価担当副分科会長 吉村澄佳（医学部）

「健康」A - D4 クラスの履修学生を対象として、平成 30 年度 1 学期に授業評価アンケートを実施した。質問項目は、学部、学年、性別、授業内容の評価 12 項目、授業を受けての自身への影響 3 項目、自由記載である。有効回答数は A クラス：116 名、B クラス：81 名、C クラス：110 名、D クラス：112 名であった。

1) 回答者の特徴

(1) 学部別のクラス人数

A-D のクラス別にアンケート回答者の学部を示す（図 1）。クラスによって回答者の学部に偏りがあった。理学部は D クラスの選択者が多く、教育学部は B クラスの選択者はいなかった。

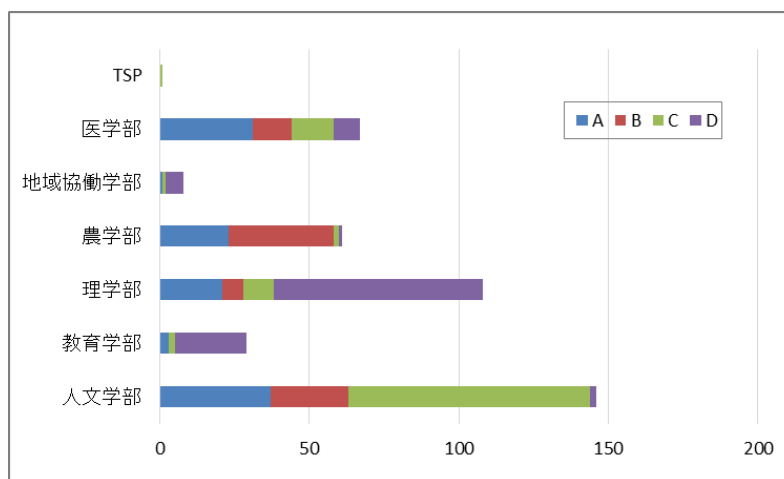


図 1. 学部別のアンケート回答者数

(2) クラスの学年割合

A-C クラスでは 1 年生が 85%以上を占めており最も多かった。D クラスは 1-3 年生がそれぞれ、32%、38%、26%の割合であった。

2) クラス別にみる授業評価 15 項目の結果比較

評価指標 15 項目の結果をクラス別に示す（図 2）。項目 1-12 は授業内容の関する項目である。うち項目 1-7 は教員の準備状況や取り組みに係る内容であり、項目 8-12 は学生の授業への関心や満足を問う内容である。

項目 1-12 のいずれにおいても、各クラスでの大きな隔たりはなかった。「2. 教員の声の大きさや話し方は聞き取りやすいか」の質問では、D クラスが他の 3 クラスよりも低いことから、使用教室の機材調整を行うことが必要であると考えられる。

「4. 授業の進み方や内容量はあなたにとって適切か」の項目は、29 年度の評価と同様にほぼ全クラスで適切であった。「7. 授業に対する教員の熱意を感じるか」の得点の高さは、設問 11・12 の学生の知識獲得や授業満足に反映されていた。しかしながら、「6. 教員は受講生が質問や意見を述べる機会をつくり答えているか」の評価はやや低く、今後は学生の反応を確認するためにも教員と学生間の意見交換を意識的に設けることも必要である。

授業を受けて学生自身への影響を問う質問項目 A-C は、例年どおり各クラスとも高い評価であった。受講学生は学部の違いはあれども「健康」の授業を受けることで「健康に関する理解を深め」、そして「学生自らの健康について改めて考え」、その結果「今後の生活の参考にする」と行動変容にも影響していた。これらのことから、本授業は勉学の基本となる健康の自己管理ができるようになることはもとより、向後に起こりうる健康障害を回避するための多様な知識を得て生活習慣の改善を行うことにつながっていると考える。

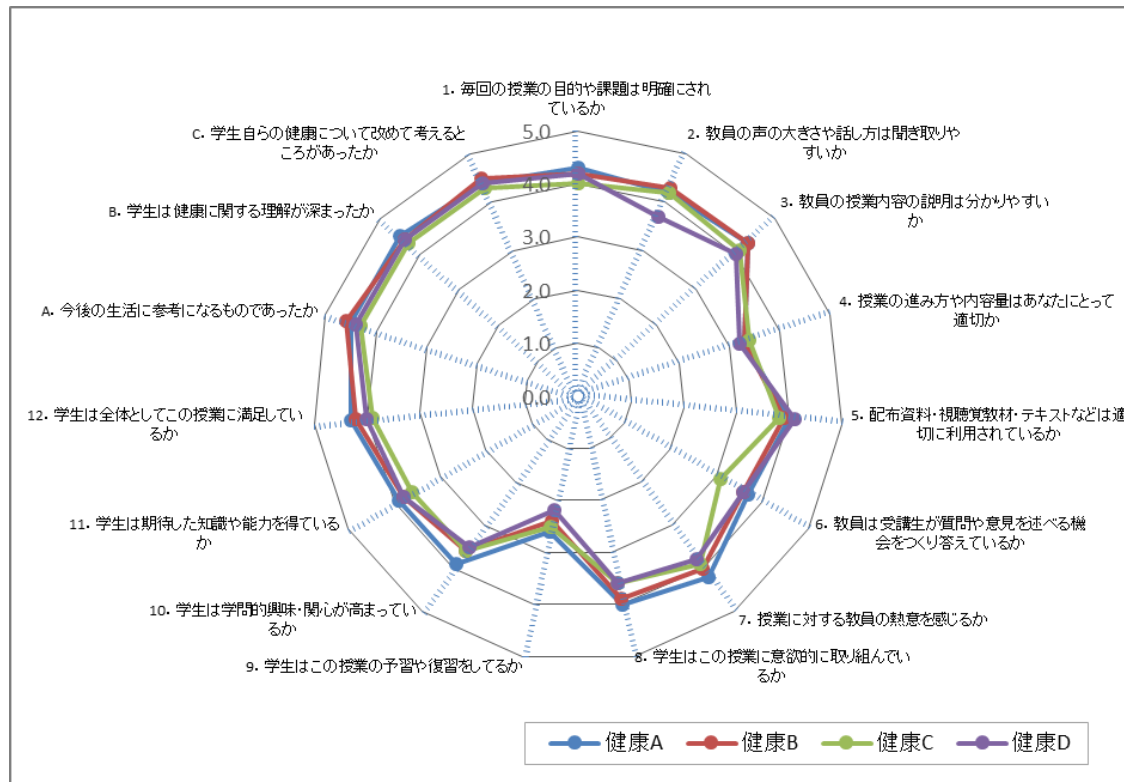


図 2. クラス別の授業評価 15 項目

3) 自由記載結果のまとめ

A - D クラスの自由記載の結果を示す (表 1)。回答を得た A-D クラス 423 名中、自由記載に回答した学生は 156 名であった。

授業環境等については、エアコン調整や学生の私語、資料についての要望があった。

表 1. 自由記載の主な内容 (複数回答)

■授業環境等についてのコメント	件
1. エアコンが効いていない	1
2. 特定の学部の学生がうるさい	2
3. 講師の声が後ろの席まで聞こえない	4
4. パワーポイントが少なく内容が伝わらない	1
5. パワーポイントの文字が小さく見え辛い	3
6. 医療場面の放映は事前の告知を希望する	1
■授業内容についてのコメント	件
1. 健康の授業への満足	40
2. 多角的に健康に関する知識を習得	23
3. 健康についての考え直し・再認識	37
4. 健康への視野の広がり	8
5. 健康への意識の高まり	5
6. 健康維持・生活改善のための決意	20
7. 健康のための具体的な行動を考える	10

授業内容については、「1. 満足した」との回答は 40 件であった。「身近な話題」の内容で、「自分の生活や体調に投影して考えられた」こと、「ふだん意外と健康について学ぶ機会がない」ことから、学生の満足につながったようである。またオムニバス形式である本授業の特色から、「2. 多角的に健康に関する知識の習得」ができていた。「普段聞きなれた[健康]はあらゆる要因を含んでいるものであること」の理解が、「3. 健康への視野の広がり」や「5. 健康への意識の高まり」という学生の学びになっていた。さらに、授業を受けて「6. 健康維持・生活改善のための決意」をした学生がおり、「生活習慣を改善する必要性を感じた」とコメントしている。そして、多くの学びが「7. 健康のための具体的行動を考える」という学生の行動変容にまで影響を及ぼしており、食生活や睡眠習慣などの改善を実行するという行動に結びついていた。昨年の授業評価との比較では、「生活改善を決意する」、「具体的行動を考えてみる」の記載は、2 倍の回答数があった。

自由記載の中に、心の健康に関するものが 6 件あった。「大学に入ったばかりでいろいろと不安だったりストレスがあったけど…」や、「自分はメンタルが弱い方なので…」という記載があり、本授業が学生の心の負担を軽くし、前向きに学生生活を過ごすことにも影響していた。「自分の生き方やモチベーションを上げてくれるような授業を増やしてほしい」という要望が 1 件あり、今後学生の状況に即した内容の検討が必要かもしれない。

4) まとめ

健康 A-D の授業を通して学生は健康の認識を新たにし、自身の健康と向き合い、さらに学生の一部は生活習慣の改善を実行していた。今後、教員が授業評価アンケートの結果を踏まえ、学生の状況・希望に即した内容を授業に意識的に組み入れるよう検討することも、学生の健康の維持・向上に有用であると考えられる。

—FD 活動—

生命医療分科会 幸 篤武(教育学部)

生命・医療分科会の FD 活動は、運動やスポーツを基にした健康づくりの在り方について検討すべく、スポーツ・健康分科会と合同で、教員による授業参観と実施教員による意見交換を実施した。

対象授業は「ミックススポーツ I」であった。当該科目では以下の点を主題としている。

- 種々のスポーツの持つ技術体系や体力特性を理解し、練習やトレーニングを通して技術や体力を高めることを目指す。
- コミュニケーションをとり、互いに協力し合い、技術向上やゲームを楽しむことができる能力を身に着ける。
- 生涯に渡ってスポーツを実施する能力を身につける

意見交換の概要は下記の通りである。

- 「ミックススポーツ I」は平成 30 年度に新規開講となった科目であったが、学生の履修動向は概ね良好であった。また 4 日間×4 限と、身体的にハードな内容であった

と思われるが、出席状況や履修の態度は良好であった。

- 高い体力や、定期的な運動習慣を有する学生の履修が望ましいと思われた。
- 20名の定員を設けたが、器具の数や種目の内容から、妥当な水準と思われた。
- オムニバス形式の運動実技授業により、学生が多くの運動に触れることができることが利点と思われた。
- 4日間で4種目の実技を行うオムニバス形式であり、1種目を15コマで開講される通常の科目と比べて専門的に深く学ぶことができたかどうか、次年度も引き続き検討する必要があると思われた。
- オムニバス形式で多様な種目を取り入れた体育実技の授業に対する学生の需要について、平成31年度も見極めていく必要があることが確認された。

7. 自然分野分科会

自然分野分科会会長 加藤 治一（理工学部）

1. 自然分野分科会の運営体制

本年度の自然分野の教育目標は、昨年度と同様に、「自然科学に関する基礎的な知識、方法および思考法を習得し、それらを基盤とした自発的な探求力、深い洞察力および論理的な思考力を育成する」ことである。これを実現するために、自己点検評価活動やFDとも連動して、カリキュラム等編成に関する課題を点検し、編成作業を進めてきた。なお、分科会委員への情報周知や協議・作業依頼に関しては、原則としてメール会議で実施した。

本年度の自然分野分科会は次に示す12名の委員で構成される。FD担当の分科会副会長には農林海洋学部の齋幸治委員が、自己点検評価担当の分科会副会長には教育学部の加納理成委員が選出された。

【自然分野分科会委員】

分科会会長：加藤治一、分科会副会長（FD 担当）：齋幸治、分科会副会長（自己点検評価担当）：加納理成

その他の委員：原田哲夫（教育学部）、野村昇・永野高志・関田諭子・山田伸之・老川稔（理工学部）、関安孝（医学部）、柏木丈弘・寄高博行（農林海洋科学部）

2. 平成 31 年度カリキュラム等編成

平成 31 年度のカリキュラム等編成は、次のような手続きで行われた。第 1 回カリキュラム等編成部会（7 月 17 日開催）において、人事ポイントの変化に応じて各学部への担当コマ数が割り振られた。自然分野に関していうと、理工学部は前年度比 2 減、教育学部・農林海洋学部は前年度から変化無しの案が提示された。各学部に問い合わせたところ当分野に関する異存はなく、第 2 回カリキュラム編成部会（10/4）・第 4 回共通教育実施委員会（10/18）を経て、原案どおり平成 31 年度の自然分野の担当コマ数を教育学部が 9、理学部が 48、農学部が 13 とすることが承認された。この担当体制に基づき平成 31 年度のカリキュラム等編成作業を開始した。センター教員が担当する科目は、第 4 回共通教育実施委員会（10/18）を経て別途依頼された。編成作業中に、高知県より新規科目を寄付講座として開講の申し出を受けた。共通教育主管・自己点検評価部長と相談の上、自然分野の科目として編成する事とした。このように編成された科目は第 3 回カリキュラム編成部会（1/17）に提出され、原案どおり承認された。

本年度からの主な変更点は以下の通りである。

【新規開講】

- ・「さわってわかる AI 講座 ～基礎理論からクラウドサービスを使った実践まで～」 2 単位 高知県からの寄付講座
- ・「トポロジーと囲碁」 2 単位 担当：山口俊博（教育学部）

【題目変更】

- ・教養科目：「動物の進化」 → 「植物の生殖」

【廃止】

- ・「初学者の為の物理学入門」 2 単位

3. 自己点検・自己評価

本年度は内部質保証体制の構築を念頭におき、公正な成績評価に向けてこれまでの成績分布の分析を行った。まず、[1] 第2回学士課程運営委員会（5/21）における奥田理事からの要請『各学部に対して平成29年度第2学期の成績分布について分析を行い、習熟度別クラス編成の授業や難易度が異なる授業の成績評価など、学部の特性に応じた改善案を検討し、7月23日の本委員会にて報告していただくよう依頼が行われた。』（平成30年度第2回学士課程運営委員会議事要録より抜粋）を受けてのものを述べる。ここでは2017年度2学期の科目を対象としており、自然分野では分科会長および自己点検自己評価担当の副会長を中心として分析を行った。各科目の成績分布を回覧した上で、一見、割合が偏っているように見受けられた一部の科目——具体的には優以上の評価が受講生の半数を超え、受講者が10名を超えるもの——については科目担当者に成績評価の方法（試験方法・試験回数等）、教育方法などの現状について問い合わせを行った。詳細は別途報告書に譲るが、「公正な成績評価の実施に向けての申し合わせ」（以下、「ガイドライン」）施行前の時期が対象であることを鑑み、成績分布に大きな問題は見られず今後の推移を見守るということであった。次に、[2] 後述の共通教育主管との面談（11/1）を受けてのものを述べる。ここでは2018年度1学期の科目を対象とし、各科目の成績分布をまず分科会長・副会長に回覧した。その上で理工学部・教育学部・農林海洋科学部に持ち帰ってもらい、学部内の分科会委員を中心として回覧し意見交換をしてもらうよう要請した。早急に改善すべき事項があれば再び分科会にフィードバックしてもらう予定であったが、特段に問題は挙げられなかった。「公正な成績評価の実施に向けての申し合わせ」（以下、「ガイドライン」）の周知とあわせて、現状に関する意思共有が構成委員間で十分なされたと判ずる。

また分科会長は、11/1に共通教育主管、有川 自己点検・自己評価部会長を交えて面談を行った。自然分野に配当されている科目を点検し、各科目の受講生数が適正かどうか（極端に大きかったり少なかったりしないか）、開講の妥当性があるか、成績分布に極端な偏りがあるかどうか等について詳細に検討した。(1)非常勤講師が担当する科目については当然雇用予算が発生するが、全体の予算の枠内でどのようにそれらを考えていくべきか、(2)各学部／各分野のノルマ負担の公平性の担保、(3)旧共通専門科目などの取扱い、などは将来的な課題と考えられる。また、内部質保証体制の構築を共通教育内で進める必要があるとの前提のもと、その一環としてこれまでの成績分布の分析を分科会内で行うよう要請があった。

4. FD 活動

自己点検・自己評価の項にあるように成績分布の分析過程を通じて、平成29年度に学士課程運営委員会により出された「ガイドライン」案の浸透を図った。各教員の成績に関する考え方を再度見つめなおすよい機会として、将来的な意識向上に資するものであったと考える。また、第6回共通教育実施委員会（2/5）等において、内部質保証体制の構築に向け、「成績評価に関する申し立て手続き（申し合わせ）」などが議論されたが、それについて分科会での共有に努めた。本年度は自然分野分科会として独自のFD講演会などは開催しなかったが、意識付け・問題点の洗い出しとしてはひとまず充分であろうし、将来的に共通教育としての開催が予定されているFDの下準備をなしたものとする。

5. 「第 66 回中国・四国地区大学教育研究会」参加報告

日程：2018年6月2日（土）・3日（日） 開催場所：鳥取大学鳥取キャンパス

自然分野分科会からは分科会会長が、共通教育主管および他の分科会に所属する委員らとともに出席した。分科会会長は、2日のシンポジウムと3日の自然分野分科会に参加した。

【シンポジウム】

「教養・ジェンダー・教養教育（稲垣恭子）」と題した基調講演の後、「教養教育の生み出す実践力」をテーマに鳥取大学教員による2件の事例報告およびこれまでの講演者らによるパネルディスカッションが行われた。教養教育の社会的意義に関する強い問題意識が感じられた。分科会長の個人的な感想として、女子大における教養教育のあり方を知れたのは興味深かったし、鳥取大学で行われている読書ゼミの試みは示唆に富んだものと感じた。特に後者は高知大学でも一つの範とすることは可能であろう。来年度は高知大学が当研究会の幹事校となる。成果ある内容にできるよう、分科会としても準備していきたい。

【自然科学分野会】

「大学新入生への補習授業「教養基礎科目」の取り組みについて」（橋本隆司、井上順子）、
「LMSによる入学前学習の効果について」（斎藤隆仁）、
「鳥取大学全学共通科目「教養教育」地学の現状-この10年間の歩み」（塩崎一郎）、
「鳥取大学附属図書館主催「レポートの書き方講習会」への参画」（桐山聡）という4件の講演と意見交換があった。前半2つはリメディアル教育に関するものであり、実際の実践結果を中心に報告された。本学の共通教育を考える際に参考になるであろう。分科会長の個人的な感想として、学生の学習意欲を担保するのにこの大学も苦勞していると感じた。また、LMSで多大な労力をかけて入学前学習を行っているのが印象的だった。一定の効果は上がっているようではあるが、本学のマンパワーで同種のことができるかという点と難しいかもしれない。

6. 今後の課題

各学部／各分野のノルマ負担については、歴史的な経緯があり大変複雑なものになっていると感じている。将来的な担当体制に関して、共通教育の意義の見直しも含めて現段階から十分な協議をしておく必要があると考える。

8. 外国語分科会

外国語分科会長 斎藤 昌人

1. カリキュラム編成について

今年度は、引き続き専任の担当教員そのものの減少に加え、諸般の事情で授業を外れる教員が複数出てきて、カリキュラムを維持するために腐心した。

また、来年度に向けては、とくに初年次科目の英会話を担当していた非常勤講師が一定数抜けることになり、その補充にかなり苦勞をした。これについては、数少ない非常勤講師を効率よく配置できるカリキュラ上の工夫を、全学的に検討していく必要があると思われる。

2. 自己点検評価活動

昨年度実施したアンケート並びにその総括をおこない、そのもとで大学英語入門の改善を検討した。

3. FD 活動

今年度は、以下に挙げる 2 件の FD に関わる活動を実施した。2 件とも教員による学会・研究会への参加である。

① TOEIC セミナーへの参加

(2018 年 9 月 1 日、於：グランフロント大阪 コングレコンベンションセンター)

以下参加者(今井先生)の報告を引用しておく。

「セミナーの内容は、最初に、ダイキン工業株式会社によるグローバル人材育成に関する基調講演があり、その後、同志社大学(「ALL DOSHIHA 教育推進プログラム“同志社大学ビジョン 2015”—同志社大学の英語教育と英語民間支援の活用方策と目的—)、山口大学(「グローバル技術者養成プログラムにおける英語教育—TOEIC Program と未来のグローバル技術者を結ぶ CLIL 活用型授業実践事例の紹介—)、近畿大学(「TOEIC Program の全学導入とその効果、および国際学部における先進的な取り組みと海外留学の成果」)の 3 つの発表、そして質疑応答があった。同志社大での取組みの一つ、2018 年度全学共通教養科目「クリエイティブ・ジャパン科目」の新設(①京都科目、②クールジャパン科目、③クリエイティブ・ジャパン科目、④国人留学生とともに学ぶ科目)は英語を学ぶことから英語で学ぶことへの転換であり、興味深い取り組みである。また近畿大学に 3 年前設置された国際学部での 1 年生全員留学の取り組みでは、世界最大の教育機関である ELS と連携を取りながら、英語力向上への効果的な取り組みの発表があった。

以上のように、各大学、明確なビジョンを持ち、先進的に取り組んでいる内容は大いに参考となった。」

② JALT 全国語学教育学会早春会議 2019

(2019 年 2 月 4 日、於：TKP 札幌コンベンションホール)

こちらについても、参加者（バーゴイン先生）の報告を引用しておく。

“On Monday the 4th of February I attended the early spring conference held by the Speech Drama and Debate Special Interest Group from the Japan Association of Language Teachers in Sapporo. Of special interest to myself were the presentations outlining the benefits of performance assisted learning (PAL) in the reading classroom and also process drama to foster communication. The ideas and resources gained from the convention will be particularly beneficial to the Eikaiwa materials development program. Teaching methods outlined by the presenters have also been helpful in highlighting alternative means of making students aware of English stress and intonation patterns through the use of drama.”

4. その他

2019 度から、大学英語入門はレベル分けクラスを廃止する。これについては検証が待たれる。

9. キャリア形成支援科目分科会

キャリア形成支援科目分科会長 深田陽久(農林海洋科学部)

分野又は科目の教育目標

学生のキャリア形成支援に必要なプログラムを開発・提供する。

平成 30 年度の活動総括(概要) キャリア形成を支援するための科目の実施について、その他の分科会の状況を踏まえ、再度カリキュラム編成についての修正と改善を進めた。さらに、科目内で教育の質の保証と評価方法についての自己点検・評価を実施した。

1. カリキュラム編成

各講義について、その内容を踏まえて、共通教育として実施するにふさわしいか、またその内容についての再吟味を行った。講師本人の講義についての学生の受講状況や取り組みなどについての認識を共有したほか、次年度の担当可能性についての確認を行ったところ、「キャリアデザインⅠ」については「キャリアプランニングⅠ」と変更し、加えて「キャリアプランニングⅡ」と「「キャリアプランニングⅢ」を新設した。

2. 自己点検評価活動

成績評価基準とガイドラインの設定に関連して、関連科目での秀・優などの評価基準について、複数の科目で確認を行い、担当委員内でその共有を進めた。その結果、キャリア形成支援科目数は 12 科目であった。このうち 4 科目は履修者が 1~8 名であったため分析から除外した。したがって分析対象は 8 科目となり、それらの科目履修人数は 16 名~185 名であった。さらにガイドラインの対象外となる 8 科目中、演習科目が 4 科目であった。キャリア形成支援科目については「公正な成績評価の実施に向けて (申し合わせ)」から逸脱する科目は無かった。

3. FD 活動

分科会単独での FD 活動は実施しなかった。他の分科会や大学全体での FD 実施に関する情報については、担当委員内で共有した。

10. スポーツ・健康分科会

カリキュラム編成について

スポーツ・健康分科会
駒井 説夫

1. カリキュラム編成の経過

5月～10月 平成31年度のカリキュラム編成の検討開始

(特に退職教員不補充に対する妥当なノルマの検討)

11月 平成31年度の授業担当コマ数(ノルマ)の決定

11月～12月初旬 カリキュラム編成作業

12月10日(提出)

2. 平成31年度カリキュラム編成

平成31年度カリキュラム編成に当たっては、教育学部保健体育教員が、平成31年度、退職不補充となるため、スポーツ・健康に課せられたノルマを退職不補充に相応して減じること、また、教育学部以外にもスポーツ・健康の授業を担当できる人材を活用することを教育学部から要望した。

共通教育・カリキュラム等編成部会では種々論議した結果、①スポーツ科学講義・実技の履修希望者に対応できる授業数の確保、②教育学部の授業担当基本コマ数(48コマ)は分野間のコマ数を調整によりノルマを果たすことを条件に了承された。その後、新たに人文学部よりスポーツ科学実技(ローンボウルズ)を、また地域協働学部よりスポーツ科学講義Dを担当していただくこととなった。

退職教員の不補充は、共通教育授業担当体制にも影響し、共通教育だけでは解決できない問題であるので、教員確保や共通教育授業実施体制の状況については、全学的問題としてとらえ対応するよう働きかける必要がある。

3. 平成31年度の変更点

スポーツ科学実技4コマ減(14から10) →教育学部の人文分野4コマ増

新規開設科目 人文学部：スポーツ科学実技(ローンボウルズ) ノルマ外

地域協働学部：スポーツ科学講義D

—FD活動—

生命医療分科会 幸 篤武(教育学部)

生命・医療分科会のFD活動は、運動やスポーツを基にした健康づくりの在り方について検討すべく、スポーツ・健康分科会と合同で、教員による授業参観と実科教員による意見交換を実施した。

対象授業は「ミックススポーツI」であった。当該科目では以下の点を主題としている。

- 種々のスポーツの持つ技術体系や体力特性を理解し、練習やトレーニングを通して技

術や体力を高めることを目指す。

- コミュニケーションをとり、互いに協力し合い、技術向上やゲームを楽しむことができる能力を身に着ける。
- 生涯に渡ってスポーツを実施する能力を身につける

意見交換の概要は下記の通りである。

- 「ミックススポーツⅠ」は平成 30 年度に新規開講となった科目であったが、学生の履修動向は概ね良好であった。また4日間×4限と、身体的にハードな内容であったと思われるが、出席状況や履修の態度は良好であった。
- 高い体力や、定期的な運動習慣を有する学生の履修が望ましいと思われた。
- 20名の定員を設けたが、器具の数や種目の内容から、妥当な水準と思われた。
- オムニバス形式の運動実技授業により、学生が多くの運動に触れることができることが利点と思われた。
- 4日間で4種目の実技を行うオムニバス形式であり、1種目を15コマで開講される通常の科目と比べて専門的に深く学ぶことができたかどうか、次年度も引き続き検討する必要があると思われた。
- オムニバス形式で多様な種目を取り入れた体育実技の授業に対する学生の需要について、平成 31 年度も見極めていく必要があることが確認された。

11. 日本語・日本事情分科

日本語・日本事情分科会長

大塚 薫（国際連携推進センター）

日本語・日本事情分科副会長（自己点検活動担当）

佐野 由紀子（人文社会科学部）

日本語・日本事情分科副会長（FD活動担当）

神崎 道太郎（国際連携推進センター）

<活動の概要>

日本語・日本事情科目は、第1学期に「日本語Ⅰ」、「日本語Ⅱ」、「日本事情Ⅰ」、「日本事情Ⅲ」、第2学期に「日本語Ⅲ」、「日本語Ⅳ」、「日本事情Ⅱ」、「日本事情Ⅳ」が開講されている。

ここ数年、「日本事情」科目に比べ、「日本語」科目の受講者数が少なく、受講者数の偏りが見られたが、今年度は科目によっては若干改善が見られた。

しかし、受講生からは「日本語」科目の授業が週2回の授業で2単位が取得できるのに対し、「日本事情」は週1回の授業で2単位の取得が可能なため、単位取得に際し、日本語科目の単位取得に多くの時間を割かなければならないことが指摘され、それが「日本語」科目が受講生に敬遠される一つの要因になっているようだ。

現在、共通教育の開講科目として、日本語Ⅰ～Ⅳは演習、日本事情Ⅰ～Ⅳは講義とそれぞれ設定されており、そのためか、日本語Ⅰ～Ⅳは週2回×16週で2単位、一方、日本事情Ⅰ～Ⅳは週1回×16週で2単位として設定されている。教授内容に違いがあるものの、単位数に響くほどのものではなく、単位数の認定が受講者数のアンバランスに影響しているのではないかと考えられる。

上記の問題点を踏まえて、学生が週1回でも日本語科目が取れるようになることは検討すべき今後の課題である。週2回の受講の縛りをなくすことで、留学生の選択の自由度が増え、また、より多くの教員の授業を受けることができるようになると考えられる。

1.カリキュラム編成

今年度も引き続き、人文社会科学部の教員は日本事情科目を、国際連携推進センターの教員は日本語科目を担当した。科目構成は、日本語科目については前年度同様、日本語Ⅰ～Ⅳ、日本事情科目については1科目減で、日本事情Ⅰ～Ⅳを実施した。

また、2019年度の開講基本コマ数、担当体制については、面談やメール等で調整を行い、担当者及び開講曜日・時限を決定した。

2.自己点検活動&FD活動

日本語・日本事情分科会では、2006年度～2008年度にわたって分科会独自の形式で授業評価アンケート調査を全科目の受講学生を対象に実施した。それにより、各授業の自己点検評価活動が行われるとともに、共通教育日本語・日本事情科目のあり方を考えていく基礎資料とする

ことができた。また、2009年度以降は、共通教育が実施する自己点検評価活動等の実施を通して、授業の改善に努めている。

2018年度において、日本語・日本事情分科会では、日本語・日本事情科目の特性である少人数制授業に焦点を合わせ、自己点検活動及びFD活動を連動させた活動を行ってきた。具体的な活動としては、日本語Ⅰ及び日本語Ⅲの授業内でピアレビュー活動を実施するとともに、授業終了時に独自の授業アンケートを実施し、授業の自己点検・改善のための資料とした。しかし、日本語・日本事情科目は全8科目を6名の教員で担当して行っている上、今回ピアレビュー活動並びに独自の授業アンケート調査を実施した科目は限られ、統計に値する十分な資料が得られなかったため、ここでは詳細な結果は省略する。

また、2018年度における日本語・日本事情分科会のFD活動として、文部科学省の最優先課題である「高度外国人材の日本企業への就職の拡大」を目的としたビジネス日本語教育に焦点を当て、2018年9月に広島大学に赴きビジネス日本語研修を受講した。それを踏まえて、第2学期に行われた日本語科目内で留学生の日本での就職に繋がる日本語教育を展開した。2019年度以降も留学生の日本における就職時に必要なビジネス日本語教育を日本語科目内で取り入れ、留学生のニーズに応えていきたいと考えている。